最愛

津波三津

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最愛

【Ｎコード】
Ｎ０９１９Ｌ

【作者名】
津波三津

【あらすじ】
社会人三年目の美緒は、軽装で山に入り、二歳年上の大悟に助けられる。二人には似たような過去があった。第一部はその山での一日を描きます。
純愛小説です。

第一部

「これだと、2時前の電車に乗れるな」登山道がほぼ平らになったところで、大悟は後ろを歩く圭南に声をかけた。
「ああ、3時半頃には家に着きそうだ」圭南の顔からは、ほっとしている感じが読み取れる。
「今日は悪かったな。つき合わせちゃって」
「いいんだよ。子供が生まれたら、当分山にも来れんだろうし。おい、それより今から山に入ってくるやつがいるぞ」
前方を見ると、確かに若い女性が一人で登ってきている。それもどう見ても山登りの格好ではない。カーディガンに綿パン。足元は底の薄いスニーカー。ショルダーバッグを斜めにかけて、手にはペットボトルといういでたちである。
大悟が、「まさか、登るわけではあるまい」と言うと、二人の視線に気が付いたのか、女性は視線を下に落とした。大悟が、
「今から登るんじゃないよね？」と声をかけた。返事をせずに女性は脇を足早に通り過ぎようとする。
「ちょっと！」大悟は通り過ぎた女性に後ろから声をかけたが、女性は尚、足を速める。
「何、考えているんだ。今から登ったら帰りは真っ暗だぞ」苛立たしげに尚も声をかけるが、反応する様子も無い。
「途中で戻るだろう？」圭南は、駅に急ぎたそうである。大悟は腕時計をちらっと見て、
「オレ、ちょっと戻って止めてくるわ。圭南は先に帰ってくれ」
「お前もお節介な奴だな」圭南はあきれながらも、いかにも大悟がやりそうなことだと思った。
「じゃあ、そうさせてもらうよ。その前にお前の背負っている鍋を出せ。持って行ってやる」圭南と大悟はリュックを下ろし、大悟が
「悪いな」と言いながら鍋を差し出すと、圭南は

「残っている食料は持って行け。それと水。念のため、ヘッドランプと合羽も持っていった方がいいな。空がちょっと怪しくなってきた」
確かに、雲が増えた。
大悟はそれらを受け取り、パッキングし終わると、
「そんじゃあ、また。お子が生まれたら連絡してくれ。そうそう、晴さんには、無理に連れ出して悪かったって言っておいてくれよ」
「ああ、思いっきりお前のせいにしとくよ。お前も奈々ちゃんに連絡しなくていいのか？今日、会うんだったろう？」
「ああ、今から電話入れとく。じゃな」手を挙げて、足早に登山道を引き返しながら、大悟は携帯電話で奈々を呼び出す。3コールの後、
「もう、山下りた？」と奈々の明るい声が耳元に入ってきた。
「奈々、悪い。ちょっと問題が発生しちゃって、遅くなる」
「えっ、山で何かあったの？」奈々の声が不安気に曇る。
「いやっ、オレは何でもないけど、詳しくは戻ったら話すよ。悪い、電池を温存したいからもう切るから」奈々の返事も待たずに大悟は電話を切った。
怒ったろうなー。山がスケジュール通りにいかないことは、今までの経験上わかっているだろうけど、「今日は近場の山を圭南と二人だから、夕方には会えるよ」と言ってしまっていたのだ。
ここ3週間、大悟の仕事が忙しくて会っていない。それなら、ようやく体が空いた今日の昼間から会えば良かったのだが、山に行かないと息が詰まりそうだったのだ。まったく、あの女にさえ会わなければこんなことにならなかったのに。大悟は自分で自分の行為に「チッ」と舌を打った。
道は針葉樹の中に入り、カーブが続くため、女性の姿はなかなか見えなかった。まさか、登山道からはずれた所に入ったわけじゃないよな。いや、自殺志願ならありえるが。
前方から5人の中年グループが下りてくる。頂上で盛り上がって

いたグループだ。大悟は彼らに向かって、
「あの、女性一人で登っていきませんでしたか？」と尋ねた。話好きそうな女性が
「5分ぐらい前にすれ違ったわよ。あなた、そんな格好で今の時間から登ったら危ないわよ、って声かけたんだけど、お辞儀だけして行っちゃったわ。お知り合い？」と聞いてきたので、大悟は
「まあ、そんなものです。ありがとうございます」と軽く会釈をして、歩を進めた。
頂上には、このグループ以外に残っている者はいなかった。登る途中でも誰にも会っていない。時間からみても多分、もう下りてくる者はいないだろう。この山は頂上以外景色も悪く、お昼を食べるような所は無い。

六年前と変わらずに、登山道の入口は駅から十分ほどのところにあった。最初は平坦な道であることも記憶のままだった。新芽が伸びてきた木々に包まれると、美緒は少しほっとした気分になった。前方に下山してくる二人組の男性が見えた。こっちを見ている。何か言いたげである。いかにも山をやっています、的な雰囲気の二十代と思しき二人の内の背の高い方が、すれ違う直前に声をかけてきた。無視して進む。お節介は無用である。
道が上りに入る。道も標識も整備されているので、迷うところは無かったはず。スニーカーとはいえ、底はぎざぎざラバーなので、特に滑りはしない。ただ、底が薄く、石が直接当たる感じがするのが気にかかる。
しばらく行くと、上からにぎやかな声が聞こえてきた。グループの登山者らしい。道が細くなり、すれ違いが難しいところにさしかかった。少し道をはずして、下りてくるのを待つ。また、何か言われそうだと思っていたら、案の定、声をかけられたがお辞儀だけして、やり過ごした。世の中に、そんなにお節介をしてくる人はそうそういるわけがない。

傾斜がまた一層、急になる。ちょっとハイペースで登りすぎたようで、脚に疲れを感じはじめた。ペースを落とそう。昔習った脚の運び方を思い起こす。体重移動をしてから、膝を後ろに送り出す感じで、だった、確か。

大悟がやや急ぎ足で進むと、道の傾斜がきつくなると同時に、つづら折となったため、やや上の方に女性が見えてきた。直に追いつきそうだ。近づいてみるに、どうやら登山を全く知らないわけではなさそうである。

「登山をやったことあるだろう？」後ろから声をかけてみる。

えっ、何で後ろから人が？美緒は戸惑いながら振り返った。最初に会った二人組の内の声をかけてきた方である。なぜ？

「顔になぜ？って書いてあるな。オレもなぜって思うぜ。なぜ、そんな格好でこの時間に登り始める？」大悟は努めて押さえた口調で尋ねた。

えっ、何、お節介で付いて来たの、この人？

「わざわざありがとうございます。でも、大丈夫ですから、どうぞ戻ってください」美緒はやや早口に平坦な口調で答えた。

「そうはいかない。遭難したらどうする」激さない、激さないと自分を押さえながら大悟は続けた。

「君は良くても、たくさんの人が振り回されることになる」

「この山は登ったことがあります。自分の身は自分で何とかできます」これ以上、話をしても無駄だろう。美緒は背を向けてまた、登り始めた。

やれやれ、何なんだ、この強気な女は。手を引っ張って無理矢理にでも引きずりおろしたい衝動を抑えながら、大悟は黙って付いていくことにした。無理に下山させても、また入られてしまったら元も子もない。自分のお節介にはほとほと呆れるよ、と思いながら。

美緒の意図に反して、男は黙って付いてきた。何なの、この人。どうして付いてくるわけ？勘弁してほしい。でも、どうせその内呆れて帰るに違いない。もう、何も言わないし。

更に二十分ほど登ったところで、みんなが休憩に使っていると思われる、汚れの無い手ごろな岩があった。ちょっと、休もう。美緒は座ってペットボトルのお茶を口にふくんだ。

男は脇に黙って立っている。その、いかにも美緒の休憩を待っています、という風情に苛立って

「あの、迷惑なんですけど。付いてこないで下さい」と、美緒は上目遣いににらみ、不愉快さを隠さなかった。

「お前が下りるまでついていく」大悟は静かに答える。

「何の義理があって、そんなお節介するんですか。それにあなたにお前呼ばわりされる覚えはありません」立ち上がって、美緒は冷たく言い放った。

「おれは香川大悟だ。お前は？」美緒は、「木下美緒です」しまった。つい、反射的に答えている。

「木下か。木下は山をやったことがあるだろう？」

「昔、ワンゲルに半年だけいました」

何で、私答えちゃっているんだろう、こんな奴に。

「何でやめた、半年で」

「ランニングが嫌で」美緒は顔を背けながら答えた。

美緒の答えに大悟はフッと笑いを含んだ顔になった。

「いかにもだな。やりたくないことはやらないタイプと見た」大悟の表情が穏やかになっている。

「どうせ、何か嫌なことでもあって山に来たんだろう？」

図星である。上から見下ろしてくる視線が痛い。

「あなたには関係ありません」

「まあ、そうだな。それでどうする？これから。ワンゲルやっていたのなら、頭冷やして考えてみろ」

「登ります」美緒は踵を返し、再び登り始めた。
「木下は学生か？」懲りもせずにまたついてくるらしい。「お前」が「木下」に変わったが、名前も呼び捨てで、どうせ男尊女卑男なんだろう。
「違います」後ろも振り返らず、美緒は答えた。

こんな浅はかなことをするのは学生かと思ったが、違うというところを見ると社会人か。二十歳ぐらいにしか見えんが。
ポニーテールの後姿を見上げながら、ちょっと鈴子に似ているな、と一瞬大悟は思い、慌ててそれを打ち消した。
つづら折が終わると、木の杭を埋め込んだ階段状の坂になった。美緒は腕をまくっていたが、背中を汗が流れるようになったので、カーディガンを脱ぎ、腰に巻きつけた。
土曜の会社はカジュアルでも問題ない。人がいない分、寒いだろうと思って、中にハイネックシャツを着ていた。下はストレッチタイプの綿パンなので、伸縮性に問題は無かったが、汗をかくと、張り付いてくる。
階段状の斜面を登っていくと、美緒は、子供の頃学校のスポーツテストでやった、踏み台昇降を思い出した。単調な昇り降り。段々息が上がるが、テープの声に合わせて昇り降りを繰り返さなければならない。つまらない上に辛く、一体いつ終わるんだ、もうやだと思いながらやったあれである。
山の階段状の登り道は同じ幅ではない。自分の歩幅と合わない階段はしんどく、ストレス感が増す。何段か登ると太ももが張ってきた。少し休み、また登るをひたすら繰り返す。一体どこまで続くんだ、と思いながら。
階段状の道が四十分ほど続いた後、ようやく尾根道に出た。今までは聞こえなかったが、尾根の向こう側からバイクの音が幾つも重なって聞こえてくる。下の道をツーリングしているのだろう。かなり登ったつもりでも、下界からは、なかなか離れられない。

景徳山山頂の標識に沿って、尾根を左手に折れる。二十分ぐらいは緩やかな尾根道だが、左右を木々に囲まれ、時々近くの山がのぞく以外は何も見えない。二人は無言で歩き続けた。

さすがに大悟も同じ山を一日に二度も登るのは初めてであった。もっとも、行きは、先ほどの尾根の分岐をもっと先まで行った所から登ってきたのであるが。しかし、ここから先は同じだ。もうすぐ、山頂直下の急傾斜に入る。

「木下、荷物を寄越せ。そんな荷物を持っていたら、これからの傾斜についていけない」ずっと黙っていた大悟の声に驚き、美緒は瞬時に断ることができなかった。

斜めに提げたバッグが腰の上ではずんでいる。ペットボトルが片手を塞ぐ。前方を見上げると、滑りやすそうな坂だ。滑った時に、そばに立つ木の枝をつかめないと、バランスを崩して、滑り落ちそうである。

「遠慮するな。そんなことで体力を消耗したらしょうがないだろう」諭すような大悟の口調に美緒の気持ちは揺らいだ。ここで、荷物を預ければ追い返すことができなくなってしまう。私は一人でいたいのに。

その気持ちを見透かすように

「オレが荷物を持っていても、気にすることはない。オレに気にせず好きなように登ればいい。一人で思う存分登ればいい」

そうだ、思う存分登ってくれ。鈴子の顔がまた浮かぶ。

そこまで言われて、美緒は返す言葉が見当たらなかった。どうせ、何を言っても付いてきそうだ。どうしようかと思いつつ、急傾斜に足を踏み入れる。足下が滑りやすく、一歩一歩に時間がかかる。登山靴でないのは辛い。足裏の筋が張ってくる。息も上がる。

腕時計を見る。もうすぐ二時四十分。雲が広がり、太陽の位置がわからない。十分ぐらい前に頂上まで五十分の標識を見た。この調子では、きっとそれより時間がかかるだろう。頂上に着くのは三時

半を過ぎるはず。そうなると、下にたどり着く頃には五時半を過ぎていて、山の中は途中から殆ど真っ暗に違いない。空気も冷えてきた。まだ、四月の中旬である。駄目だ。ヘッドランプも無いのに。

美緒は、大悟に向かって「下ります」とぼそっと呟いた。

「あん？下りる？あと四十分だぞ、頂上まで」

「下りる頃には真っ暗です」

「そんなの、最初からわかっていたことだろ」大悟の口調は落ち着いている。「ヘッドランプならある。どうせなら登ったらどうだ」

「どうしてですか。無謀な登山を止めたいんじゃないんですか？」

どうして更に登ることを勧めてくるのか。何を考えているんだろう。さっきと言っていることが違う。

「無謀な登山にとことん付き合ってやるよ」大悟は笑っているようにも見える眼差しで見上げてきた。

「道は単調で迷うことは無い。もう十回以上登っている山だ」景徳山は、駅から歩ける手ごろな山であるため、大悟はシーズン始めにウォーミングアップを兼ねて何度も登っていた。大学の山岳部のトレーニングで夜間登山もやっている。

そう言われれば今更引き下がれない。どうしよう。答えない美緒に、

「だから、荷物を渡せ」と再び大悟が声をかけた。美緒が渋々渡したバッグを、大悟はリュックに詰め込んだ。

「ペットボトル」と言いながら、大悟が手を伸ばす。「リュックのサイドに入れるから、オレに声をかけずに勝手に取って飲め。遠慮は禁止だ」美緒は黙って頷き、「行きます」と告げて上を目指して登り始めた。

傾斜がきつい。十歩進むと息が上がる。大悟は全く平気そうである。今日、二回目だろうに、何だでもなさそうだ。

「休み休み登れ」下から指示が飛ぶ。

あんたに言われなくても休むよ。美緒は心の中で毒づいた。実際、

休み休み登らないと足が進まない。体力が落ちたものである。登るならトレーニングをしないと駄目だな、とちょっと思い、別にまた登るわけじゃなかった、と思い直す。

何で、登山って辛いのにするんだろう。馬鹿みたい。じゃあ、登らなければ良かった？美緒は苦しい呼吸の中で考える。

駅の案内板に「景徳山」の文字を見て、反射的に電車から降りてしまったのである。

何で、登りたいって思ったのだろう。ワンゲルで、最初に登った山だったから？自分でもよくわからなかった。

本当は、もっと登りたかった、という気持ちがあったことをふと思い出す。でも今は辛い。あそこで下りれば良かったんだ。あいつがいなければ下りていたのに。

ちょっと気を抜いた隙に足が滑り、慌てて枝をつかむ。指先に擦り傷ができる。もうやだ、足を上げたくないと思ったその時、「あと五分だ」下から落ち着いた声がかかる。あと五分。五分経てば、この苦しみも終わる。それを支えに美緒は、山頂を目指した。

美緒の苦しげな登りをすぐ下で感じながら、山岳部の新歓登山を大悟は思い出していた。いつも新歓登山はこの山である。九百メートルぐらいの山であるが、高低差が大きく、初めて登山をやるものには、最後のこの傾斜はきつい。

仮にも体育会である。トレーニングも兼ねているからグズグズしている奴に容赦は無い。間違っても「休み休み登れ」などとは言わない。こんな山で音を上げていたら、本格的な登山はできないのである。新歓登山だけで退部するものが毎年いた。鈴子も辛そうだった。

あの時も下から「あと、五分」と声をかけたっけな。また、鈴子を思い出してしまった。いかんな、今日は。

山頂にはもちろん誰もいなかった。美緒はあぁ、こんなところだ

ったけ、と六年前の記憶を手繰りよせる。登りきった感激は特にはなかった。雲が重く立ち込めている。百六十度位の視界が開けていて、見晴らしは良いが、遠くの山々は霞んでよく見えない。
「午前中なら富士山がきれいに見えたのにな」大悟がすぐ後ろにたたずんでいた。
「いいんです。この山に誰もいないと思うだけで、満足です」実際、美緒は達成感が心を解放していくことを感じていた。
「悪いな。邪魔して」
「いえ、香川さんがいなければたどり着けませんでしたから」振り返りながら美緒が発した殊勝な言葉に、大悟はちょっとたじろぎ、
「そうか」と小さく答え、時計を見た。午後三時四十分。下りには最低二時間はかかる。
　美緒は大悟が時計を確認したのを見て、
「もう、下りますか？」と聞いた。
「いや、少し休まなければ駄目だ。脚が張っているだろう？回復させないと、脚がもたんぞ」
　確かに美緒は、太ももふくらはぎも足の裏も、カチカチに張っていることを感じていた。登山は下りこそが厳しい。脚が疲れているのに、片足ずつ体重を支えながら下りなければならないからだ。事故は下山途中に多い。足首を挫きがちだし、うまく体を支えられずに滑落もしやすい。
　その時、ついに重く黒い雲から雨粒が落ちはじめた。
「降ってきたな」大悟の言葉には特に困った様子の響きは無かった。空を見上げながら、
「雨具ならあるから、心配するな」と言葉を続ける。
　えっ、雨具もある？何で？そう言えばヘッドランプもあると言っていた。もしかすると連れの人の？私とすれ違った後に、そこまで考えて素早くそれらを詰め込んだってこと？
　美緒の疑問に答えるかのように、
「さっき、一緒にいた連れのだ。あいつが気を利かして渡してくれ

たんだよ。オレは、すぐにお前を止めることだけを考えていたから、そこまで気が回らなかった。冷静な奴だからこうなることも予測していたのだろう。あいつにはいつも助けられる」大悟が左の方を向き、

「取りあえず、そこを下った所に丁度いい窪みがあるんだ。そこで少し休もう」と言って、先にたって歩き出した。

山頂下にある窪みは岩が庇のようにせり出していて、運よく風向きも反対であったため、雨が吹き込みにくくなっていた。そこに大悟が小さなシートを敷き、半分ほどを空けて腰をおろす。

美緒は一瞬躊躇したが、隣に腰をおろした。さっき知り合ったばかりなのに、同じシートに二人っきりで並んで座るなんて、普通に考えればありえない。この人が悪意を持っていないとも限らないわけだし。まあ、そういう人には見えないのだが。美緒はこのお節介の真意がわからなかった。

腰を落ち着けると、脚の張りが一層感じられる。足の裏は全体がじんじんしている。美緒は靴を脱いだ。

「その靴だと下りが厳しいのはわかっているよな」大悟の言葉に美緒はうなずく。底が薄く、足首がホールドされていない靴では、疲れやすく足を挫きがちである。

「その靴で登ったのはお前の責任だが、ここまで登らせたのはオレの責任だ。その靴だと雨も浸み込むし、足の負担が大きい。とにかく怪我をしないように、ゆっくり下りよう」大悟は、自分にも言い聞かせるかのような口ぶりだった。

その時、美緒のお腹がクーという音を立てた。

「お前、昼飯食ったか？」大悟が美緒の方を見ながら聞く。美緒は首をすくめながら小さく首を左右に振った。

「食料は持っているのか？」その問いにも、首を振って答える。

食料を持っていないことがどういうことだか、美緒には十分にわかっていることだった。大悟が息を吸い込み、同時に組んでいる拳

に力が入ったことを美緒は感じた。怒鳴られる！と思い、身を固くする。
大悟は正面を向き、ゆっくりと「おまえが学生だったら怒鳴りつけていたな」と言ってから「大人なら逃げて山に入るな。取り返しがつかないことになる」静かに諭すように言葉を継いだ。
美緒は小さく頷く。大悟は荷物の中からアルミホイルの包みを取り出し、
「これも連れに渡された。奴に感謝して喰え」とおにぎり2個を渡した。
冷えたおにぎりは、梅干が入っているだけだったが一粒一粒にしっかりとした歯ごたえと旨みがある米だった。
「美味しいです」気持ちが素直に口から出てくる。
「圭南は、ああ、圭南というのが連れの名前。圭南は料理好きで味にはうるさいんだよ。今日も山頂で鍋をやろうというんで、オレが鍋をかついできたんだが、普通寄せ鍋とかと思うだろう？ところが奴は、こんぶから取った出汁と自作のポン酢までペットボトルに詰めて持ってきて、しゃぶしゃぶをやるって言うんだ」大悟がおかしそうに笑う。
初めて見た大悟の笑顔が、美緒の心の扉をちょっと押し開いた。
美緒は唐突に話を始めた。
「仕事で失敗して、会社に６００万の損失を出しちゃったんです。2年目で初めて任された半年がかりの大きな仕事だったのに。注意深く取り組んでいれば起きなかったミスで、部長に昨日怒鳴られました。細かい詰めを面倒ぐさがったんだろうって。その通りなんです。お前の年収以上の損失だ。一年間ただで働けって」ため息が出る。
「本当は、今日はその後始末に出社しなければいけなかったんですけど、どうしても新宿で乗り換えられなくて。公園でぼーっとして、もう会社辞めようって思って、家に戻るためにホームに下りたら、丁度、長距離列車が発車するところだったから飛び乗っちゃった。

ぼんやりと外を眺めていたら、景徳山の文字が見えて。ワンゲルの最初の登山で登った山だ、と思ったら、なぜだか急に登りたくなって。電車を降りて自販機でお茶だけ買って……」そこで、口をつぐんだ。

「大きな会社か？」

「一部上場の貿易会社」

「大丈夫だろう、６００万ぐらいの損失は。会社も研修費だと思ってくれるよ」大悟は水筒を口に含む。

そうかもしれないと、美緒も思っていた。ただ、部長にはどうしても顔を合わせたくなかったのだ。部長の苦りきった顔が浮かぶ。

「山に逃げても解決はしない。解決は自分でするもんだ。辞めるにしろ、このまま二度と行かないわけにはいかないだろう？」大悟はそう言いながら、空になっている美緒のペットボトルにもう一本の水筒から水を移す。水筒には、ＫＥＩＮＡＮのシールが貼られていた。

「香川さんは、逃げ出したくなるようなことってありません？」

「あるよ、そりゃ。オレは雑誌の編集をやっているんだけど、刷り上った本の表紙のでっかい文字を間違えたことに気づいた時は、そりゃあ逃げたいと思ったね。月刊誌だから一ヶ月も人目にさらされる」

それもきつそうである。美緒は続けて、

「そういう時はどうします？」と聞いた。

「山に逃げる」大悟はくすっと笑って美緒を見た。

「但し、計画を立ててだ」と、付け加えながら。

「香川さんは、何でここまでお節介をするんですか？」美緒はずっと思っていた疑問を口にした。

美緒が尤もな質問を口にした時、大悟は、どこまで話すべきなのかをすぐには決められなかった。さっき知り合ったばかりだ。重い話をする必要は無い。適当に自分のお節介な性分だけを話せばいい

んじゃないかと。だが、まだ下りもある。嘘は苦手だ。
　大悟の躊躇する様子を見て、美緒は、何かあるんだ、ということを感じ、
「ただのお節介なら、それはそれでいいんです」と、話を打ち切ろうとした。
「いや、理由はある。大学の山岳部の時に、後輩を山で亡くした。奥多摩のここと同じぐらいの高さの山でだ。オレはその時、奥穂高を登っていた。同学年の奴らとだ。その後輩は、奥穂高に一緒に行きたがっていた。でも、レベル的に無理だと判断して、諦めさせたんだ。そして、奴は同じ日に一人で奥多摩に入った。天気が良ければ何てこと無い山だ、ここと同じように。でも霧が出たんだ。そして道に迷った。よりにもよって、携帯も忘れた……。奥穂高から下山した日に、奴の携帯から電話が入った。お父さんからだった。道に迷って滑落死だったことを知らされた……」大悟は苦しげな表情で語った後、
「だから、山で危ない奴は見過ごせないんだ」と付け加えた。
　大悟は話し終えると、遠くを見たまま、押し黙った。思い出したくないことだったろうに、と美緒は自責の念にかられる。
「悪い。暗い話をしてしまった。こんな話は本当はするつもりじゃ無かったんだけどな」
　大悟はこの話を山岳部の関係者以外にしたことが無かった。奈々にも話したことは無い。黙っていてくれるよう、圭南に頼んだくらいだ。圭南も晴子も口が堅いので、決して漏れることはなかった。
「私の方こそ、無理矢理話をさせてしまったみたいで。でも、香川さんには滑落死の責任は無いです」美緒はきっぱりと言い切った。
「ああ、直接にはな。もちろんこの件では誰からも責められなかった。親御さんからも。でも、間接にはある……と思っている」
　責任感が強すぎるよ、と美緒は思ったが口には出さなかった。無謀な登山を見捨てておけないのはわかるけど、普通そこまでするだろうか。もっと、無責任に生きた方が楽なのに。それに、この人、

その悲しみをまだ処理しきれていないに違いない。それは大悟の苦しげな表情が物語っていた。
多少の沈黙の後、美緒は口を開いた。
「うちの爺さんに昔、言われました。死んだ人をいつまでも悲しんでもしょうがない。悲しんでも二度と帰って来ないんだから。最初に思いっきり悲しんだら、あとの悲しむ時間は勿体無い。自分の人生だってそんなにあるわけじゃない。死んだ人を思い出すなら、どうせなら、その思い出した人に励ましてもらえって。それで私、友達を交通事故で亡くした時に立ち直れました。辛いときは思い出して、励ましてもらって、というのを繰り返しながら」
本当だった。美緒は高三の六月、彼の高校最後のバスケの試合を見に行った。その帰り道、彼は横断歩道で左折トラックに巻き込まれて轢かれた。即死。遺体の状態が酷いということで、お葬式でも棺の中は見せてもらえなかった。
同じ電車で帰って、美緒は一つ前の駅で降りた。電車のドア越しに手を振って別れたのが最後だった。あまりに辛くて、学校にも行けなかった。思い出がありすぎた。
親友の五月が心配して、毎日寄って話を聞いて一緒に泣いてくれた。ずっと同じ思い出話ばかりをしていたと思う。よく覚えていないけれど。そして、夏休みになっても部屋に閉じこもっている所に、爺さんが来てそう言ったのだ。
「そんなの無理って最初は思ったけど、このままでは自分が駄目になる、と思って、無理してなるべくそう考えるようにして、というのを繰り返していたら、ある日その友達が『笑ってよ』って言ったの。もちろん自分が言わせているんでしょうけど。でも、そうだ、笑おうって思って。そこから立ち直れた」
そう、それは夏休みがあと一週間で終わる日だった。本当に彼が言っているように聞こえた。そこから受験モードに切り替えて、彼と一緒に行きたかった大学に合格することもできた。そして、もっと違う世界を知りたくてワンゲルに入ったのだ。

「そうか。いい話だな、それ」大悟は遠くを見ている。
「オレは、自分ではもう終わったことだと納得しているつもりではいるんだ」
そうなのだろうか。美緒はその答えに納得できなかったが、それ以上、追求することもまたできなかった。
「そろそろ下りないとな」と言いながら大悟が立ち上がる。雨は、細かい霧雨に変わっていた。
「私、お花摘みに行ってきます」と言って、カーディガンを着ながら美緒も立ち上がった。お花摘みは用を足す言葉として、山登りの人の間で使われている隠語である。大悟が、
「お前、下に何着ている？それ、素材は何だ？」と聞いてきた。
「これはシルク」
「その下は？」
「綿の下着」
「綿は駄目だ。体を冷やす。知っているだろう？これから気温も下がるし」
そうだったと、美緒は今更ながらに思い出した。遭難時に生死を分けたのが下着の素材の違いであったこともある。
「それじゃ、それも脱いできます」
「雨の中で脱ぐな。ここで脱いで、脱いだのは上に着ろ。枚数は減らさない方がいい。オレは後ろを向いているから」と真顔で言って背を向けた。
えぇっ、ここで？そりゃ後ろを向けば見えないだろうし、この男はきっと見るようなことはしないだろう。でも、うわーという気分である。外で、知らない男の隣で、大っぴらに着替えをするなんて。
しかし、もう開き直るしかない。美緒も背を向けて急いで着替えた。シルクのシャツの上にキャミソールを重ね、その変な組み合わせを見たくないので、慌ててカーディガンを着た。
荷物をパッキングし直し、リュックにレインカバーをかけて、大

悟は美緒に合羽を渡した。メンズのＭサイズは、身長１６２センチの美緒にはさすがに大きかったが、贅沢は言っていられない。
「さてと、出発前に言っておくけど」と大悟が窪みを出ながら振り返って言った。
「下山の間はオレがリーダーだ。指示には従うように」
美緒は、
「下山の間は従います」と答える。
「そう、従うのは下山の間だけでいい。従うのは不本意だけど、だろ？」大悟はニヤッと笑い、歩き出した。
山頂直下の急な斜面は雨を含み、いかにも滑りやすそうになっていた。木の幹や枝をつかみながら、慎重に下りる。大柄な大悟が、一跨ぎで下りられる段差も、美緒には難しい。
どこに足を下ろそう、と逡巡していると、下から手が伸びてきた。えっ、つかまれってこと？美緒は手を見つめてしまった。大悟が
「手！」と言ってくる。すぐに美緒が手を出さないでいると、
「指示に従う！」と促され、大悟の大きくて厚みのある手に手を重ね、体重をちょっとだけ預けて、段差をクリアした。
そういうことを何度か繰り返しながら、下っていったが、あと少しで緩斜面になるところで気が緩んだのか、美緒は足を滑らせ転んだ。手と合羽がドロドロになる。あー、人の合羽がと思ったが、大悟は
「怪我しなかったか？」とだけ言って、荷物からタオルを出して寄越した。「タオルは手を拭いたら、雨が入らないように首に巻いておけ」
美緒は、タオルの汚れを内側にして折り、首筋に巻く。少しまた雨が強くなってきた。
なだらかな尾根道を歩きながら、大悟はさっきの美緒の話を思い返していた。もしかすると、オレは鈴子が亡くなった時に思いっきり悲しまなかったのかもしれないな、と思う。

大悟は、ただ自分をひたすら責めていたことを思い起こした。そして、それを口にすることもできずにいたことも。じっとしているのが辛くて、山に行こうとすると、必ず圭南がついて来た。圭南は言わなくてもわかっていた。ある日、山の上で隣に座った圭南に言われた。

「自分を責めてもしょうがないし、山に逃げてもしょうがないよ。鈴子ちゃんは記憶の中の人になってしまったけど、ずっと誰の心の中でも、深く生き続けることができる」

そう、もう生きている鈴子はいない。自分を責めても責めなくても変わりはないんだ、もうこのことを考えるのはやめよう。そう思うことで、自分を立ち直らせた。でも、本当は鈴子に会えない寂しさを、もっと深く噛みしめておいた方が良かったのかもしれない。

そしてまた、鈴子への気持ちを奥に閉じ込めたまま、奈々とつきあっていることに、多少の後ろめたさを、大悟は感じていた。

奈々は、晴子の会社の後輩で、圭南の家で飲み会をやった時に紹介された。鈴子が亡くなってから、彼女を作らず、山岳部の女性達にも決して近づかないオレを、圭南と晴子が気にして、山に登らない女性を見繕ってくれたのだ。

奈々は、ピクニック程度の丘陵歩きに誘っても決して応じなかった。「何で休みの日に、わざわざ疲れに行くのか理解できない」とか言って。スポーツ用品の会社に勤めているにも関わらず、だ。彼女にとってスポーツは見るものであるらしい。でも、大悟が山に行くことに対しては、決して文句を言わなかった。そして山の話をせずに済むのは、ある意味大悟にとっても気楽で良かったのだ。

尾根道が終わると、山の中は、もう薄暗く、光が地面まで届かない状態だったので、二人ともヘッドランプを装着した。美緒は、ヘッドランプを点けるほどの暗さの中を下りるのは、初めてだった。ランプの光が届くところだけが、不気味に浮かび上がる。鳥の鳴き声も聞こえない。直に真っ暗だろう。世界に二人だけ取り残された

ような不安な気持ちになった。
雨脚がまた一段と強まる。足先はびちゃびちゃで冷え切っていたが、とにかく足を下ろしていくことに集中した。二人は無言で下り続ける。時々、大悟が手を差し伸べる時だけ、「すみません」と美緒は小さく答えていたが、大悟が「いちいち謝らなくていい」と言うので、その絶妙なタイミングで出してくる手に、ただ手を預ける、というのを繰り返した。
三十分に一回ぐらい休みを取ったが、それも水と飴などの受け渡しをするだけだった。美緒は、疲れがかなり脚にきていた。下りるということは片足で体を支えることであるが、ゆっくりと支えることが難しくなってきていた。早く下りが終わって平地にたどり着きたい、そのことだけを考え続けていた。

大悟も二度目の下山で、さすがに疲労感を感じていた。でも、それ以上に美緒が疲れていることは歩き方でわかった。
ここでこいつがもう歩けないと言い出しても、さすがにおぶって下りるのは無理だな、しかし、こいつもよく泣き言を言わないものだ。足も冷えているだろうに。
時々取る手も冷たかった。大悟の首筋もタオルを巻いていてもぬれ始めている。とにかく集中力を切らせないようにして、怪我をさせないことだ。大悟は、ぬかるみやつまずきそうな所を、細かく伝えることにした。

美緒は時々ボーっとしながら歩いていたが、大悟が足元の様子を言ってくるたびに、はっとして、そこを避けるように通過した。そして頭の中では、こんなびしょ濡れで、山を下りた後、どうすればいいんだろう。こんな格好で電車に乗るなんて考えられないし。長距離列車ならまだいいかな？でも立川で降りて、中央線快速にこんな格好で乗れないよ。仮にも女の子なんだから。立川で何か買う？でもお店にだって入れないし。という心配がぐるぐる繰り返され

ていた。
足裏の筋が張り、しかしそれ以外の感覚は麻痺してドタ足になっていたため、膝に衝撃がかかり、疲れが溜まって辛かった。でも荷物も持ってもらっていて、泣き言は言えない。まだか、まだか、とひたすら思っていた頃に、ようやく登山口近くの緩斜面にたどり着いた。
大悟が振り返って、
「近くにいつもお世話になっている小さな鉱泉宿があるけど、寄っていくか？近くにはコンビニもあるから靴下とかなら換えられるぞ」と言ってきた時には、美緒は考える間もなく頷いていた。

コンビニで下着を買い、店員や周りの客から哀れみの視線を投げかけられながら、二人は店を出た。雨がやんでいた。その鉱泉宿は街道に面した、小さな日本家屋風の旅館だった。玄関先に灯る白熱灯が、暖かく自分を迎えてくれているようで美緒はほっとした。ガラス戸は、木枠もガラスも丁寧に磨き上げられている。
大悟が、「こんばんは」と入っていくのに、美緒は続いた。奥から女将さんらしき人が、「あらあら、大悟君。いらっしゃい。随分、雨にやられたみたいね」とにこにこしながら、出てきた。
女将さんは五十歳ぐらいだろうか。結い上げた髪が着物姿によく似合っていた。大悟は、「突然すみません。こっちは山で拾ってきました」と美緒を指す。
「木下美緒です」と美緒は慌ててお辞儀をした。
「美緒ちゃんね。どろどろになっちゃって、大変だったでしょう？まず、合羽を脱いで。今、ハンガーを持ってきますから」
女将さんは取って返し、ハンガーとビニール袋とタオル、仲居さんがお湯の入ったバケツを二つ持ってきた。女将さんは、合羽をハンガーにかけ、汚いのも気にせず、玄関の横にかける。
「はい、汚れた靴下はビニールに入れて。足をお湯で洗って上がって」

女将さんはテキパキと動き、美緒の靴を見て、「これは洗いましょう。乾燥機で乾かせば大丈夫」と、靴を手に取った。美緒が「私が洗います」と言うと、
「いいのいいの。まずお風呂に入って温まってちょうだい。風邪をひいたら大変」と言って靴を持って行ってしまった。
美緒も大悟も、ズボンの裾は雨が染みていた。裾をまくり、足をバケツで洗う。冷え切った足先が温もりに包まれていく。美緒は、ふーっと大きく息を吐いた。
無事に下山できた安堵感に美緒は包まれた。今更ながらに気がついたが、足にはマメができ、その幾つかは潰れていた。よく歩いたものだ。
タオルで拭き、上がったところで、女将さんが浴衣と丹前と、新しいタオルを持って現れた。
「はい、じゃあこれを持って、お風呂は地下よ。脱衣場に洗濯乾燥機があるから、それを使って。お夕飯も食べるでしょ？」と大悟の方を向いて尋ねた。
「すみませんね。突然に来たのに。土曜日で忙しいでしょう？簡単なのでいいので、お願いします。木下も食べるだろ？」大悟が振り返って言う。美緒は「はい」と答えた。

お風呂に行く途中で、若いカップルとすれ違った。何だか自分達も、二人で旅行に来ているカップルみたいで気恥ずかしい。
大悟と別れて、美緒が女風呂の暖簾をくぐると、中に誰も人はいなかった。夕飯の時間だからだろう。ドラム式の洗濯乾燥機に着ている物全部と、下洗いした首に巻いたタオルを入れる。コイン式ではなく無料のようである。洗剤も液体せっけんが上に載っていて、「ご自由にお使いください。」と書いてある。こういう細やかなサービスに、あの女将さんの人柄が感じられた。
お風呂は、小さいながらも石造りで、落ち着ける空間だった。窓の外は真っ暗で見えないが、川に面しているようである。雨に濡れ

た髪を軽くシャワーで流し、ささっと体を洗って、美緒はお風呂に浸る。お湯に入って、体の芯まで冷え切っていたことに、初めて気がついた。ふくらはぎはガチガチに張っている。

良かった。無事に下りられて。美緒は朝からの長い一日を思い返した。冷静に考えれば、あり得ない行動である。投げやりな気持ちだったことは確かだ。大悟が荷物を寄越せと言ってきたところで、初めて我に返ったと言っていい。

一人で登っていたら、自分を見失ったままで、引き返すことも考えなかったに違いない。そうしていたら、どうなっていたことだろう。こうやって、無事に帰りつけなかったかもしれないのだ。冷静になった今考えると、ぞっとするようなことである。美緒は、深くため息をついた。

でも、あそこで、途中で下山していたらどうだったろう。確かにここまでは濡れずに済んだし、暗くならずにも済んだ。でも、満足も得られずに帰ることになったはずだ。そう考えれば、不意の同行者に感謝しなければ、と思った。

浴衣を着て、髪をドライヤーで乾かす。洗濯は乾燥に移っていたが、まだ一時間以上かかるようだ。ブラシを出すために鞄を開ける。大悟が鞄を丁寧にビニールでくるんでくれていたので、どこも濡れていない。

電源を切ったままだった携帯を取り出す。会社からかかってくるのが嫌で切ってしまったのだ。電源を入れるのが恐かったが、このままにしておくわけにもいかない。恐る恐るオンにする。たちまち着信が点滅した。着信は五回。全て会社から。一回目と五回目は留守電も入っていた。

1回目は朝、課長からだった。労わるような声で、「有村だ。出て来いよ。待ってる」と。課長は今回の件ではずっと庇ってくれていた。部長にも「自分のチェックが甘かったので」と謝ってくれもした。本当に申し訳ない。五回目は夕方、部長からだった。「横田

です。昨日は少し言い過ぎた。明日も出社するから来て欲しい。君は逃げない人だと思っている」

はい、すみませんでした、部長。美緒は心の中で謝った。

男風呂は丁度、年配の二人組が風呂場から出てきたところだった。洗濯機も空いている。合宿で泊まる時は取り合いだったが、普通の宿泊客で使う人はまずいない。洗濯機を回し、大悟は風呂に浸かった。

鉱泉は沸かし湯であっても、お湯の滑らかさが家の風呂とは違う。疲れも溶け出すかのようだ。

半日登山のはずが、二回も登って扇屋で風呂まで入ることになるとは。そうだっ、奈々にも連絡を入れないと。心配しているかもしれない。

大悟もまた、一日を、特にその中でも二回目の登山を振り返っていた。鈴子のことを何度も思い出したことが、大悟には驚きだった。最近は山に登っても鈴子のことを思い出すことはなかった。

女と登ったからだな、と大悟は思う。鈴子が亡くなってから、女性と登ったことは殆ど無い。山岳部でも男性だけで難関ルートを登っていたし、大体が先頭を歩いてた。新歓登山でも、常に男子グループを率いていた。

美緒が玄関脇のロビーに近づいていくと、大悟の話し声が聞こえてきた。電話をしているようである。

「ごめん。まだ扇屋なんだ。今度埋め合わせするから。うん、はいはい、何でも好きなものご馳走しますよ」

大悟が美緒の姿に気がつき、

「じゃ、また連絡する。じゃな」と言って電話を切った。美緒が口を開く前に、

「聞こえちゃったな。別に相手は怒っていないから大丈夫だ」と、大悟が機先を制す。

約束を反古にしてしまって、本当に大丈夫なのだろうか。美緒は謝るべきかと思いながらも、口を突いて出たのは、
「彼女ですか？」という言葉だった。
「まあ、そうだ。山でスケジュールが狂うことには慣れている」
「一緒に登らないんですか？」
「ああ、山には全く興味が無いらしい」
へー、こんな山好きの人の彼女が、登らない人だなんて。美緒は驚くと同時に、趣味が合わなくて辛くないのだろうかと、ちょっと思った。
そこへ、女将さんが「温まった？」と言いながらやってきた。
「はい、お陰さまで」続けて美緒は「あの、女将さん。合羽を拭きたいのですけど、何か拭くもの貸してもらえないでしょうか？」と尋ねた。
「はいはい、今用意しますよ。この合羽かなり大きかったみたいだけど、大悟君の？」
「いや、それは圭南のです。今日、途中まで一緒だったんですよ。ほら、晴さんが臨月なんで、奴は先に帰ったんです」
「あらっ、そうなの。もう臨月なのね。晴ちゃんもいよいよお母さんか。何だか想像できないけど」と言って女将さんは笑った。
大悟は、美緒に説明するかのように話し始めた。
「晴さんは、山岳部の二つ上の先輩なんだ。バリバリしていて、ガンガン登る。オレや圭南は一年の頃、全く付いていけなかった。すごい人だったよ。でも、まさか圭南とくっつくとは夢にも思っていなかったけどな」
「あら、私は、圭君が晴ちゃんのことが好きだっていうことに、最初の頃から気づいていたわよ。それに女丈夫の晴ちゃんに、下からそっと支えるタイプの圭君は、ぴったりだってこともね」女将さんのふふっと笑うその顔は、自慢そうであった。
女将さんがまたバケツにお湯を汲んで、古タオルと共に持ってき

ながら、
「もうすぐ、お夕飯できるけど、何か飲みますか？」と大悟に聞いた。
「じゃあ、ビールお願いします。木下は？」
「同じでいいです」
「はい、わかりました。じゃあ、それを拭き終わったら、広間に来てね」と言って女将さんは奥へ戻っていく。仲居さんが慌しく料理を運ぶのが見えた。忙しい時間帯なのに、女将さんはそんな素振りは露にも見せない。
「いい人だろう？」大悟がつぶやくように言った。
「そうですね。暖かくて、大らかで」美緒は合羽を拭きながら答えた。なかなか取れない汚れに難渋しながら。
「大体でいいぞ。圭南はそんなこと気にしないから」
大悟にそう言われても、そう簡単に諦めるわけにはいかない。会ったことも無い人のものである。しかし、ある程度以上はどうしても取れないので美緒は諦め、タオルをすすいで今度は大悟の合羽を拭き始めた。
「オレのはいいよ。乾いてから、払えば大体落ちるから」
そうかもしれないが、はい、そうですか、とやめるわけにもいかない。
「一通り拭かせてください。ささやかなお礼の気持ちとして」美緒は振り返らずに答えた。とても顔を見て言えるセリフではない。
ほう、一応礼を言う気持ちはあるのか。意外だな。そう思いながら大悟は答えた。
「わかった。気の済むようにやってくれ。でも料理が冷めるといけないから、ほどほどにな」

広間に入ると、女将さんが座卓の上に料理を並べているところであった。鯉こく、山菜の天ぷら、こごみのお浸し、沢蟹のフライ、刺身こんにゃく、などなど。そして、真ん中にはカセットコンロが

置かれ、その上には土鍋が載っていた。
「美味しそうー」美緒は思わず声をあげた。朝コーヒーを飲んで、山の上でおにぎり2個を食べた以外に、今日は何も食べていない。
「お膳で出すより、座卓の方が座りやすいでしょう？鍋も大きい方がいいし。この鍋は猪豚ね。沸騰したら具を入れてね。足りなければもっと持ってくるわよ。あっ美緒ちゃんはこっちに座って」と座椅子を引いてくれた。
大悟が
「全然簡単なものじゃないですか」と言うと、女将さんは
「キャンセルが出ちゃったから、丁度良かったのよ、こっちも。料金はお安くしておきますから、安心して。泊まっていくなら部屋も空いているけど」と二人に交互に視線を投げかける。美緒は、
「明日、仕事なので」と答えた。
「あらっ、日曜日にある仕事なの？」
「いえっ、仕事でどじ踏んじゃって。その後始末なんです」とやや下向き加減に答えた。
大悟がほぉっという顔をしているのが、目の端に見えた。
大悟が、
「板長、今大丈夫ですかね？食べる前にちょっと挨拶したいんですけど」と女将さんに聞く。
「大丈夫よ。一息ついたところだと思う」
「じゃ、ちょっと行ってきます」
大悟が出て行くと、
「相変わらず律儀ね」と言って女将さんは美緒の方に向き直った。
「山で拾ったって言ってたけど、今日知り合ったの？」
「はい、そうです」
「そう。道理でね」女将さんは何かを考えるようにフッと息を吐いた。
「大悟君、後輩だったお付き合いをしていた女性を山で亡くしてから、山に登る女の子連れてきたこと無かったから。本当に今日は驚

いたわ。こだわりがある内は、完全に立ち直れていないと思っていたのでね」
ああっ、亡くなったのは彼女だったのだ。悲しみを処理し切れていないと感じたのは、やはり当たっていたのだろう。美緒は
「それは、いつのことですか？」と尋ねた。
「大悟君が二年生の九月だったわね。夏の合宿から親しくなったって聞いていたけど。だから、本当に二ヶ月ぐらいの付き合いだったのよね。私もその子、鈴子ちゃんっていうんだけど、鈴子ちゃんとは新歓合宿で会っただけなのね。芯の強そうな子だったわ。もう今年で七年も経つのよね」
七年前。同じ頃だ。それも丁度私が立ち直り始めた頃。美緒は複雑な感覚に襲われた。
「彼、今、晴ちゃんの会社の後輩の子とおつきあいしていて、一度連れてきたことがあるの。彼だけ山に登って、その子は、本当に一歩も山に入らず、ここでのんびりしていたから、それもびっくりだったわ」女将さんは、大悟のことが心配でならないのだろう。
美緒の「本当にたまたま山の中で会っただけなんです。でも、助けられました」という言葉に女将さんは「助けたがりなのよね」と言って微笑んだ。
助けたがり。本当にそうだ。なのに助けられなかった、彼女は。それがどんなに辛いことかは想像に難くなかった。あんな恐いもの無しみたいな人なのに、心の深い所で傷を負ったままなのかもしれない。七年も経つというのに。

大悟が戻ってくると、女将さんは
「今、ビール持ってきますけどご飯はどうします？後？」と聞いてきた。
「いや、腹減っちゃったから一緒にお願いします」と大悟が答え、
「木下も減っただろう？」と同意を求めたので、美緒は頷いた。

女将さんがビールを開け、美緒と大悟のグラスに注ぐ。大悟が
「女将さんもいっぱい飲みましょうよ」と言って、ビンを持ったので、「あらあら、いいの？」と言いながら、コップに注いでもらい、大悟の「じゃあ、お疲れ様」の声で、軽く三人でグラスを合わせた。
鍋が煮立ってきた。美緒が菜ばしに手を伸ばすと、大悟が
「いい。オレがやる」と菜ばしを取った。美緒が「えっ？」と驚いていると、女将さんが
「いいのよ、美緒ちゃん。ここの山岳部は何でも男性がやることになっているの。遠慮なくやってもらいないさい。お櫃も大悟君の方に置くから、よそってもらって」と言う。大悟が
「男性がやるのは女将さんの教育方針でしょうが」と言ってふふっと笑いながら、硬そうな野菜からどんどん鍋に入れる。
「まあね。大悟君の十期ぐらい上の子達から、ここに来るようになったんだけど、男の子はみんな座ったまま、殿様みたいにしていて、もっと疲れているはずの、少ない女の子達が働くのを、当たり前のような顔で見ているから、私が怒ったのよ。でも、怒ったのはその時だけなんだけどね」女将さんは愉快そうだ。
「それ以来、山岳部は男子が何でもお世話するのが伝統ですからね。新歓合宿でここに来て、最初の指導が、まずそれってことになっていますから」
「そう、ちゃんと伝統になっているわね。でも、この前も現役の子たちが来たんだけど。最近の女子は駄目なのよ。今度は女子が、女王様みたいな顔で座っているだけになっちゃって。晴ちゃんみたいに、気配り、目配りする子はいないの」
二人で楽しそうに盛り上がっているので、美緒は話の邪魔にならないように、小さな声で「いただきます」と言いながら軽く頭を下げ、食べ始めることにした。もう、おにぎり二個は遠の昔に消化されてしまったようで、腹ペコだった。
まずは、山菜のてんぷらに箸を伸ばす。タラの芽を口に含むと、ふわっとした香が広がった。おいしー。何これ。高級スーパーで売

っているやつなんか目じゃない。目が泳ぎそうである。
「晴さんは、すごい人ですから。酒はがんがん飲むし、俺にもがんがん飲ませるけど、飲めない奴には絶対に勧めないし、オレ達が飲めない圭南に無理に飲ませようとしたら、ものすごい剣幕で怒られましたよ。もし何かあった時、責任が取れるのっ！って。一瞬で酔いが醒めましたね、あん時は。それに飲みながらも、話の輪に入れない奴には声をかけたり、登山の時も登っていても下りてきて、へばっている奴を励ましながら様子を見たりとか。晴さんがいた時は、女子は一人もやめなかったな」大悟は話しながらも、美緒のグラスが空くとすかさずビールを注ぎ、自分のはさっと手酌する。
「そう、本当よね。そういう子がもう、四年生にもいなくなっちゃって。何でもやってもらって当たり前みたいな感じなのよ」女将さんはかなり不満げである。
「オレ、夏の合宿に顔を出すので、軽く言っておきますよ」
「そうね。大悟君が言えば効き目あるし」
「そんなＯＢ面するの、嫌なんですけどね」
「大丈夫よ。大悟君はＯＢたちの中でも一目置かれているから。と言うか、恐れられていると言った方が正しいかしら？」女将さんが茶目っ気たっぷりに言う。
「オレ、そんな怒ったことないですよ。山でゴミ捨てた奴には、一回怒鳴りましたけど、あとは危ないことが無い限り何も言いません」
「一回怒れば十分よ。ねえ？」女将さんはおかしそうに笑いながら、美緒に同意を求める。「もちろんです」すかさず美緒は答えた。
背が高く、声も大きい大悟が怒鳴ったらその迫力は想像しただけでもすごそうだ。良かった、怒鳴られなくて、と美緒はこっそり首をすくめた。
女将さんはビールを飲み干すと、「ごゆっくり。あとで締めのうどんも持ってくるわね。電車はまだまだあるから大丈夫よ」と言って部屋を出て行った。
向かい合わせで二人っきりになると、美緒は視線のやり場に困っ

たが、大悟は気にする様子も見せず、
「女将さんと二人で、わからん話をしてすまなかったな」と言う。
この人もまた、見かけによらず気配りの人なのだ。美緒は
「いえっ、その山岳部楽しそうでいいなって思って聞いていました」
と答えた。
「私がいたワンゲルは、もう男社会そのものでしたから。女性が何
でも用意し、片付ける、お酌もするのが当たり前で。でも部の方針
は男子だけで決めるし、やたら先輩は命令口調だし。それに酒は無
理強いするし。ランニングより、それが嫌でやめた、というのが本
当のところです」
毎回味わう不愉快さが、どうしても山に登る心地よさを上回って
いた。だからやめたのである。本当は、もっと登りたかったのだ、
忘れていたその思いが、再び美緒の心に湧きあがってくる。
「そうか。そういう感じだと、連帯感とかも生まれにくいしな」
「連帯感？必要なんですか？」山を登るのは基本的には個人の行為
だ。別に互いをロープで繋ぐような登山ではない。グループで登る
場合、リーダーの指示に従うことを求められているのであって、連
帯感が必要な場面を美緒は想像できなかったし、そんなことを考え
たこともなかった。
「連帯感が無いといざ何かあった時、危険なんだ。誰も自分のこと
しか考えなくなって」
確かに、ツアー会社が主催する登山ツアーで大量遭難した時は、み
んなばらばらになってしまっていたのは知っている。
「さっき、下山した時、感じなかったか？木下とは知り合ったばか
りだったけど、暗がりの中を一緒に下りる者として、オレは感じて
いたよ。木下はかなり辛かったはずだ。でも泣き言を言わないし、
オレの指示には従っていた。だからオレも絶対に怪我をさせずに下
山させるっ、て思った」
美緒は驚いた。「指示に従え」、と言われたのでリーダーの指示
には従おうと思った。出された手には確かに体を預けた。でも殆ど

無言の下山であった。段々辛くなってきて、話もしたくない状態でもあった。とにかく迷惑をかけたことだけはわかっていたので、必死について下りたのである。あれが連帯感だったのだろうか。
「あっ、もう鍋が煮えてる。ご飯も、もう食うだろ？」大悟がご飯をよそい始める。
　美緒はお礼を言ってご飯を受け取り、居住まいを正した。「あの」と言いかけた時、大悟は察するかのように、
「礼ならもういいぞ。さっき合羽を拭いてもらったから、それで十分だ」
「でも」と言う美緒を制して、
「これはオレのお節介から始まったことなんだから。気にしなくていい。いいから食べよう。煮えすぎると不味くなる」
　でも、このままで終わらせるわけにはいかない。美緒は、
「それなら、私の反省の弁を聞いてください」と粘った。
「そうだな。それなら聞こう。だけど、食べながら話せ。折角の料理なんだから」
　大悟は鍋にどんどん具を継ぎ足しながら、同時にどんどん掻きこんでいる。
「はい」美緒も鍋に手を伸ばす。猪豚を食べるのは初めてであった。豚とは違う香りが味わい深い。
「美味しい」、と思った通りの言葉がそのまま口から漏れて出る。しかし、美味しいものを食べると何で、幸せな気持ちになるんだろう。大悟が
「これやるよ」と言って、タラの芽のてんぷらを美緒の皿に置く。
「これをさっき喰っていた時、思いっきり幸せそうな顔をしていたからな」
そんな顔を見られていたのだ。美緒は小さな声で「いただきます」と言った。確かにもっと食べたいとは思っていたのである。
　仕切り直して、美緒は、
「普段は、もっと冷静なんです、私。というか冷静だと思っていま

した。でも、今日は完全に自分を見失っていました。あのまま一人で登っていたら、どうなっていたかと思います」
「途中で気づくだろう。死にたいわけじゃないんだから。あの時も自分で下りると言い出したし」
「いえっ、あれは香川さんがいたから、冷静に考えられるようになったんです。一人だったらわかりません」
「そうか。それならお節介した甲斐があったというもんだ」
そして、大悟はグラスを口に運びながら、
「頼むから一人で山に入らないでくれ。誰も山で死んで欲しくない」と言ってビールを飲み干した。
美緒は黙ってうなずき、お盆を引き寄せ、二本目のビールを開けた。大悟のコップに注ごうとすると、
「自分でやるからいいよ」と大悟はビンを受け取ろうとする。
「たまにはお酌させてください。私がお酌をするなんて、滅多に無いことなんですよ。それに私、そこの山岳部員じゃないですし」と美緒は片目をつぶった。
美緒はお酌が嫌いだった。会社の飲み会でも決してしない。暗に期待されていることがわかっていてもだ。女子社員にお酌を平気でさせる奴を密かに軽蔑していた。
「それではありがたく」美緒が注ぐと、すかさず大悟はそのビンを取り、「ほら、そっちも」と言って注いでくれた。
そして、「木下は彼氏いないのか？」と聞いてきた。美緒は「いたら、一人で山に入ったりしません」と憮然と答える。大悟がおかしそうに
「それもそうだな」と笑った。
美緒は、迷った。このまま違う話題に行くべきなのか。このまま大悟の傷には触れない方がいいのかと。さっき知り合ったばかりである。プライバシーに立ち入る関係に無いことは十分にわかっていた。
でも、今日、私がこの人に救ってもらったことは間違いない。そ

して、もしかすると、私もこの人を少しは救えるかもしれない。自信があるわけではなかった。でも、このまま知らないふりをするのも嫌だった。

いいよね、裕貴。応援して。美緒はそっと心の中で語りかけた。

「さっき、女将さんに聞きました。山で亡くなったのは、つきあっていた彼女だったって」

「そっか」

女将さんが話した？冷静を装ったが、大悟には驚くべきことだった。女将さんは決して大悟にこの話題を振らないし、もちろん奈々を連れてきた時も何の素振りも見せなかった。それを、こいつに話したのか。

「二ヶ月つきあっただけの人だったって」美緒は続ける。

「そうだ」

「でも、香川さんはまだ苦しんでいる、と私は感じました……。女将さんも、そう感じているようです」

「あと少しで七年になる。傷は癒えている。彼女のことを思い出すこともあまりないし」大悟はこの話を終わらせたいようである。

「本当ですか？私には、傷にかさぶたを貼りつけて無理矢理隠しているように思えるんですけど」そこで一呼吸して、美緒は続けた。

「さっき山で話した、交通事故で亡くなった友達っていうのは、つきあっていた彼でした。七年前のことです。高一から二年間つきあいました。高校生の恋なんて、子供の恋って思うかもしれないけど、そんなことは無いです。お互いに、好きっていう以上に信頼感があって、この人と、ずっとやっていけるって思っていました。それ以降、彼氏ができないのも、そこまで信頼できる人に会えなかったからです。ちょっとつきあってみる、ぐらいの人はいました。でも、すぐにわかるんです。今はこの人、私のことが好きだから色々親切にしてくれたりするけど、本当は自分自身が大事な人だなっとか。私って男見る目有りすぎっ、て思っちゃったり」美緒は無理して笑った。

大悟は美緒が、正面からこの話を振ってきたことに戸惑っていた。
かさぶたで隠している？傷が癒えていないってことか。傷を隠そうとしていたことは、確かだった。これは、いつまでも残る古傷だと思っていた。そして、自分でもそれを見ないようにしてきた。治ったと、思わせようとしてきたのだ。
大悟は箸を置いて、ビールをちょっと含み、鍋の火を弱めた。大量にあった鍋も、もう殆ど残っていない。そして、コンロの火に視線を落としたまま話し始めた。
「二ヶ月のつきあいだ。それも毎日一緒にいたわけではない。山岳部の中では、あくまで先輩と後輩だったし」
部の中でカップルができると、そこのつながりが強くなりすぎて、全体の連帯感に影響した。だから、なるべく知られないように過ごした。部の中では、つきあっていることを知っている者は殆どいなかった。
「亡くなった時、彼女のお父さんに言われたよ。鈴子のことを思っていてくれたのは嬉しい。でも、短いつきあいだ。大悟君は、鈴子のことは忘れて、自分の人生を歩んでほしい。私は、人は死んだら終わりだと思っている。うちには宗教は無い。お墓参りもやらない。命日に何かやるとかいうことも無い。だから、家にももう来なくていいって。そこまで割り切っているお父さんには正直驚いたが、とにかくそう言われたら、自分をそれで納得させるしかなかった。確かにたった二ヶ月だ。彼女の全てがわかっていたわけではない……、と思う」大悟の言葉が切れる。
「本当の相手に出会えたら、期間は関係ないです」
期間は関係ない。そうかもしれない。だけど実際はどうだったろうか。二ヶ月の間で、二人っきりで夜を共にしたのは、一夜限りだった。鈴子は、親元から通学していたので、外泊は難しかった。その一夜も家族に嘘をついて来たものだった。だが、いつも一緒でなくても、分かり合えていたと思うし、思いたかった。

「本当の相手だったかどうかはわからない。だけど、そう思いたい気持ちはある」
　最近は、命日のあたり以外は鈴子を思い出すことも殆ど無くなっていた。なるべく思い出さないようにというのを、繰り返し自分に課してきたからだろう。でも、時々夢に現れる。鈴子がにこにこと笑顔でこっちを向いている。しかし、呼んでもこっちには来ない。逆に悲しそうな顔の時は、抱きしめたいと思うのに、手が届かない。いつも、目が覚めると懐かしく嬉しい気持ちの後に、言いようの無い寂しさに襲われた。でも、それだけだ。それ以上どうすることもできない。

「たった二ヶ月でも、人生の中の大きな出会いでしたよね」
「そうだ」それは確信を持って言える。
「無理に、その気持ちを押し殺しては、その悲しみから出られないと思う」
大悟は黙っている。
「私は、彼が、裕貴が、本当に好きでした。今でも好き。会えてよかった。だから、もういなくても、その思いを支えに生きていきたい。それにそうしないと、自分は幸せにはなれないって思っています。だから、香川さんも、レイ子さんへの思いを押し込めたままにしないで下さい」
　美緒の真剣な眼差しに、大悟は圧倒されそうだった。オレが、鈴子のことを思い出さないようにしたのは、思い出すことが辛かったからだ。だから、鈴子への思いも忘れようとしてきた。でも、それは、本当は無理なことなのかもしれない。いや、きっとそうだろう。忘れられるわけがない。
「オレは」大悟は言葉を探す。オレの思いは、ただ一つだ。鈴子の顔が浮かぶ。
「鈴子が、心底、好きだった。今でも好きだ。会いたいし…、抱き

しめたい」
大悟が一言、一言、切ない表情で話す言葉に、美緒は胸が震えた。
大悟は、自分の思いの底にあった言葉を口にしたことにたじろぐと同時に、気持ちがふっと安らいでくるのを感じた。
「こんなことは、誰にも話したことが無かった。こんな話、聞かされる方が迷惑だと思っていたから。自分の気持ちは全部、自分の胸の内だけにしまって、自分でも触れないようにしようと思っていた」
黙ってうなずく美緒の目から、熱いものがこぼれそうになり、美緒はそっと指でぬぐった。
いかん。慌てて大悟は上を見上げる。その時、「入りますよ」という声と共に女将さんが入ってきた。大悟は
「トイレに行ってくる」と言って、女将さんとすれ違うように出て行った。

女将さんはコンロの火を強め、うどんを入れる。そして、お茶の用意をしながら、
「ごめんなさい。今の話、立ち聞きしちゃったの。美緒ちゃんも辛い過去があるのね」と言う。女将さんの目が赤い。
「でも、ありがとう。大悟君に話してくれて。私が、彼が立ち直っていないと言ったから、話してくれたんでしょう？」
「たった半日、香川さんと関わっただけですけど、同じ傷を持つ者として感じるものがありました。だから、女将さんの話を聞いた時は、やっぱりそうだったのか、と思いました。私は友達が話を聞いてくれたり、家族が労わってくれたりして、立ち直れましたけど、香川さんは、まだそうじゃないんじゃないか、という気がしたんです」
「そうね。今の話を聞いていて、私ももっと大悟君の話を聞いてあげれば良かった、と思ったわ。逆にこの話は触れない方がいいんじゃないかと思って、ずっと避けていたのよね」
女将さんの気持ちはもっともだと、美緒は思うのであった。

大悟は、洗面台で軽く顔を洗い、浴衣の袖で拭った。鈴子が死んで、涙が出たのは初めてだった。美緒の涙目を見た瞬間にこみ上げてきた。今までだって、別に我慢していたわけではなかった。亡くなった直後はひたすら自分を責め、泣く機会が無かったというのが正しい。

今頃涙が湧き上がってくるとはな。木下がオレの話なんかで涙ぐむからだ。お陰でこっちまで、突然堰が切れてしまった。でも、今まで誰も触れてこなかったオレの心の扉を、初めてノックしたのが奴だったとも思えるのだった。

二人がごちそうさまをすると、女将さんは時計を見て、「九時三分ので帰るといいんじゃないかしら」、と言いながら片づけを始めた。あと三十分しかない。急いで帰り仕度をしなければ、と立ち上がった瞬間、美緒の右足が吊り、思わず「イタッ」と言いながら顔をしかめた。大悟が慌てたように言う

「どうした？」の問いに

「足が」しか答えられない。すぐに吊ったことを理解した大悟の

「座れ」という言葉で、とにかく美緒は体を屈めた。大悟が反り返っている足先を戻す。大きな痛みが引き、美緒は大きく息を吐き、畳に腰をおろした。大悟は美緒の浴衣の裾を少し捲り、引き続きふくらはぎから足先までをマッサージしている。

「足がかなり張っているな。これは明日は筋肉痛がひどいぞ」ちょっと嬉しそうな言いぶりだ。

「そっちの足も出せ」美緒は曲げていたもうもう片方の足も前に投げ出した。マッサージは、馴れた手つきで、痛気持ちいい。

今日会ったばかりの男性に足を差し出すことになるとは。美緒は気恥ずかしかったが、今更どうするわけにもいかなかった。

「しかし、随分マメができているな。潰れているのもあるし。よく歩いたよ、この足で」一応、感心してくれているようだ。私もそう思うよ、と美緒は心の中でつぶやく。本当に自分で自分を褒めたい

ほどに。
女将さんが針と絆創膏を持ってきてくれた。大悟が針をコンロの火で消毒し、マメに刺して水を抜き、絆創膏を張ってくれた。

急いで着替え、お勘定を女将さんに尋ねると
「一人二千円」と言う。お風呂とあの食事でそれは幾らなんでも安すぎる、と二人で主張したが、女将さんは頑として二千円の金額を変えようとはしない。仕方なく二人はその好意に甘えることにした。
美緒が五千円札を出し、「これで二人分お願いします」と言ったら、大悟が二千円を美緒に渡してきた。美緒が「いらない」と断っても、「それは絶対に駄目」と財布にねじこまれてしまった。女将さんがその様子をニコニコ見ながら、千円のお釣りを返してきた。
美緒の靴は、綺麗に洗われ、更にしっかりと乾いた状態で、玄関に並んでいた。

帰り際に、奥から女将さんの夫である板長が出てきた。穏やかそうな、落ち着いた感じの人で、女将さんにお似合いだった。美緒がタラの芽の感動や、猪豚を初めて食べたこと、鯉こくが締まっていて美味しかったこと、などを話すと、嬉しそうに、「夏になったら鮎が取れるから、またいらっしゃい」と言う。女将さんが「この人が釣るのよ」と言うので、美緒が「そうなんですか。私も釣りをやってみたいです」と言うと、「竿を用意して待っているから」と言ってくれた。

上りの立川行きはがらがらだった。ボックス席の窓際に向かい合って座る。お腹も満ち、酒も適度に回り、美緒は心地よい疲れを感じていた。大悟は窓の外をぼんやり眺めている。外は真っ暗で、時々街灯が見えたかと思うと、すぐにトンネル、というのを繰り返す。
大悟が
「お前、どこで降りるんだ?」と聞いてきた。

「国分寺。香川さんは？」
「オレは高尾で京王線に乗り換える。お前は終点まで寝ても大丈夫だな」
確かにこの調子だと、途中で寝そうである。
でも、寝顔を見られるのは気恥ずかしいので、寝たくはない。窓の外に目を向けると、高い所を高速道路が通っているのが見えた。頭が段々ぼんやりしてくる。駄目だ、とても起きていられそうにもない。
大悟が外を見たまま、一人語りのように話し出す。
「木下。さっきはありがとう。木下の話を聞いたから、オレも本音を口にできたんだと思う。それに話してみてわかったよ。確かにオレは傷をかさぶたで隠して、それを見ないようにしていた。でも、話したら、かさぶたが少しはがれて、治りかけの傷が見えてきた感じだ。鈴子への気持ちを無理に抑えることは無いんだ、と思えてきた。感謝する」
うん？何？この人なんかお礼を言ってる？私、ちょっとは役に立ったってこと？美緒は半分夢の中でそう思い、吸い込まれるように、そのまま眠りについた。

「お客さん、終点ですよ」
美緒が目を開けると、車掌の顔がすぐそこにあった。
「あっ、すみません」反射的に立ち上がり、ドアに向かう。誰ももう乗っていなかった。
はー、良かった。立川か。東京駅まで行ったかと思った。ぼーっとしながら、快速電車のホームに向かう。すぐに東京行きが来た。
あー、そういや高尾で降りるって言ってたな。挨拶し損なっちゃった。どうしよう。連絡先も知らないし。扇屋の女将さんに教えてもらおうかな？個人情報だから駄目だって言われたら、お礼状を渡してもらおう。
あれこれ考えている内に、すぐに国分寺駅に着いた。今朝、憂鬱

な気持ちで電車に乗ったのが、遠い昔のようである。長い一日だった。明日は顔を上げて会社に行こう。カバンの外ポケットからパスケースを出そうとすると、指に紙切れが触れた。うん？引っ張り出すと、二つ折りになった、手帳のきれっぱしだった。

広げると、そこには携帯の番号と、その下に「一人で山に入る前に連絡しろ。　香川」と書かれてあった。

まったく、どこまでお節介な人なんだか。自分の彼女を大切にした方がいいと思いますよ。そう思いながら美緒は、紙片を丁寧に畳み、パスケースにしまった。

最愛　第二部　前編（前書き）

美緒は、大悟とスポーツクラブで再会する。お昼に誘われ、大悟の親友の圭南と会ったことにより、一緒に山に登ることになる。

最愛　第二部　前編

朝から初夏のような陽気だった。美穂は自転車を勢いよく漕ぎながら、この後の予定を考えていた。えーっと、バレエのクラスは、十時からだから、その前にちょっとだけ走ってみよう。あー、でも、ランニングマシーンって混んでいるから、すぐには使えないかもしれない。まーその時は自転車漕ぎでもいいか。

スポーツクラブに着くと、更衣室で家から着てきたレオタードの上に、トレーニングウェアを重ねた。そして、昨日買ったばかりのランニングシューズを履き、バレエシューズと巻きスカートが入った袋を提げて、トレーニングルームに入った。いつもより、人が少ない。ゴールデンウィークの初日だから、みんな出かけたのであろう。

ランニングマシーンもがら空きだった。機械の前にある使い方を読んでいると、トレーナーのお兄さんが近づいてきて、丁寧に説明してくれた。ストレッチを軽くやり、マシーンに乗る。速度はせいぜい時速五キロぐらいかな、と思いつつセッティングすると、マシーンがゆっくり動き出した。たらたらと走る感じである。

正面のスタジオではエアロビックスをやっていた。上級者向けのクラスだ。こんなゆっくり走っているより、あっちをやった方が運動量が多いだろうな、とは思う。しかし、エアロビは好きではない。ダンスは好きだけど、エアロビは楽しむというより、苦しむために踊る感じがするからだ。前方のテレビを見ながら、マシーンで走っている方がまだ、ましな気がした。自分のペースでできるし、いつでもやめられるから。

美緒は走るということが、昔から苦手だった。だから高校まで一度も運動部に入ったことが無かった。大学でワンゲルに入って、毎日荷物を背負ってランニングをさせられた時は、まったくついていけなくて、呆れられたものである。既に今日も三百メートル走ったところぐらいで、挫折しそうになってきた。じゃあ、まあ、今日は五百メートルあたりで終わりにしよう。毎週、百メートルずつ増やすということで、と自分を納得させつつ、でも、こんな短時間でやめるのも格好悪いかな、とまた思う。でも、どうせ誰も気にするわけが無いし、と思い直した。

もうすぐ四百メートルというところで、隣のマシーンに人が乗る気配がした。

「ランニングは嫌いじゃなかったのか？」隣から声がかかる。

「えっ？」

美緒が驚いて隣を見ると、大悟がちょっと笑いを含んだ顔で走り始めた。

「何で、ここに？」美緒は、走りながら話せないので、一旦マシーンを止めようとした。

「いきなり止めないで、歩いて流した方がいいぞ」

大悟の言葉にまた慌ててスイッチを入れて、時速三キロに変える。

「何でって、オレはここがオープンした時から会員だけど？」

「私もです」

「その割には見たこと無いな」

「スタジオレッスンしかやったこと無かったから」

美緒は、就職してから、運動不足を解消するために、スポーツクラブに入ろうと思い、会社の帰りに寄れる、中央線沿いを幾つか考えたのであるが、会社で周りに聞くと、どこも誰かが会員だった。会社外で、会社の人には会いたくない。そんな時に丁度府中駅近くにオープンするチラシが入った。ここなら、家からは自転車で行け

るし、会社帰りにも京王線で帰れば行けないことは無かった。美緒は、子供の頃ちょっとだけやっていたバレエをやりたかったのである。でも、結局バレエ基礎クラスは土曜の午前にしか、行けるクラスが無いため、毎週末だけ来て、バレエだけやって帰っていた。マシーンに近寄ったのも初めてだったのである。

「へー、じゃあ今までもすれ違っていたのかもしれなかったってわけだな」大悟もさすがに驚いている。美緒も驚きを隠せない。ドギマギしながら、

「ここ、近いんですか？」と聞くのが精一杯だった。

「すぐ、近所だ」

「京王線って、府中だったんですね」国分寺と府中は隣り合った市である。

あれから二週間が経っていた。大悟の電話番号はわかっていたが、お礼の電話をするのをためらっている内にどんどん日にちが過ぎていた。そしてその間にも、また山に登りたいという気持ちが高まっていった。でも、誰と登ればいいのかがわからない。会社にも山の会はあったが、中高年者ばかりであった。何かサークルに入ればいいのだろうか。でも、知らない人たちのところに入っていくのも苦手だった。取りあえず今日は、新宿で登山靴を買おうと考えたところなのである。学生時代の靴を出してみたらカビが生えていたからだ。

エアロビクスのクラスが終わって人が出てきた。美緒はマシーンを止めた。

「何だ、もう終わりか？」大悟が美緒の方を見る。

「次のスタジオレッスンに出るので」

「それ、何時まで？」

「十一時です」

「じゃあ、終わったら声かけてくれ。この中にいるから」

美緒は、スタジオに入り、トレーニングウェアを脱いで、スカートを腰に巻き、バレエシューズに履き替えた。鏡に映る自分のスタイルは決して良くはないが、気持ちだけはバレリーナに切り替わる。殆どがおなじみのメンバーばかりで、皆で要領よくバーをセットしていく。軽くストレッチをした後に、バーレッスンに入る。いつも最初は同じレッスン。これはプロであっても変わりは無い。この最初のバーレッスンだけでも美緒は十分に嬉しい。走って温まったせいか、今日は脚の伸びが良かった。

大悟は、正面のバレエレッスンを眺めながら走っていた。今まで、全く興味が無かったので、スタジオのレッスンをまじまじと見たことが無かった。特にバレエは、脚を曲げたり、伸ばしたり、何が面白いのかという感じだったのである。しかし、美緒が楽しそうにやっていることは、その表情から読み取れた。段々、レッスンの動きが複雑になっていく。先生が最初に手本を示しながら説明した振り付けを覚えて、音楽に合わせて再現するということらしい。結構難しそうである。

バーレッスンが終わると、バーを片付ける。次は、センターレッスン。このクラスは基礎と銘打ってあるが、実際は殆どみんな、子供の頃にバリバリやっていました、という感じで、美緒は若干気後れしていた。だから、センターレッスンの時は、程よく端っこの前から二列目辺りを狙っているのであるが、今日はモタモタしている間に場所を取られ、一番後ろになってしまった。あーあと思ったが、仕方が無い。センターレッスンは先生の振り付けに合わせながら、まず後ろから前に移動し、そこでターンをして、また後ろに戻る動きから始まった。当然、ターンをすると、一番後ろが一番前になる。ターンをしたところで、大悟と目が合ってしまった。うわっ、恥ず

かしい。大悟がくすっと笑うのが目に入った。挙句、大悟に気を取られていたため、動きを間違えた。後ろの人にも見られているというのに。

大悟は、美緒が困った顔をしたので、ランニングをやめて、他のマシーンに移ることにした。少々走る距離が足りないけど、まあ、いいだろうと納得して。

レッスンが終わり、モップがけをして、美緒がスタジオを出ると、大悟は足でおもりを上げるマシーンをやっていた。顔をゆがめ、見ているこっちの方が力が入りそうである。あんな重そうなおもりを上げられるんだから、景徳山を一日に二度登るのなんか、何でもないってことか、と美緒は思った。美緒は、大悟の邪魔にならないように、でも視界には入る位置で待つことにした。

ジムには二十種類ぐらいのマシーンが並んでいる。こういうマシーンはスポーツ選手がやるものかと思っていたが、そうでも無いらしい。腹の出た中年の男性や、スタイルのいい若い女性も取り組んでいる。ダイエットになるのかな？ちょっとやってみてもいいかも、などと思っていると、大悟が汗を拭きながら、こっちにやってきた。

「これから、圭南と昼飯食うんだけど、一緒にどうだ？」

「えっ、いや、そんな、お邪魔でしょうから」美緒は慌てて手を振る。

「大丈夫だよ。圭南は、誰でもＯＫな奴だから。それに、奴に礼を言いたいかと思ったんだけどな」

そうだった、圭南さんが食料や雨具を持たせてくれたから、助かったんだっけ、と美緒は考え直した。

「それなら、最初にお礼だけ言って帰ります」

「そうか。じゃあ、そうしよう。待ち合わせは十二時半に駅だから、慌てて支度することは無い。十二時頃にロビーで」大悟は、マシーンに戻っていった。

美緒は更衣室に戻り、いつも通りシャワーを浴び、サウナに入った後、ゆっくり風呂に浸かって、大悟の誘いについて考えてみた。よく考えてみると、圭南さんにお礼を言うだけじゃ足りないような気がする。何かお礼の品を渡したいな、何がいいんだろう。風呂を出て、ドライヤーをかけながら考える。メイクは口紅を引き、眉をちょっと描くだけである。美緒は化粧が嫌いだった。

十二時より十分前ぐらいにロビーに行くと、大悟はもう来ていた。
「おっ、早いな。女性は支度が遅いもんだと思っていたけど」
「私、念入りに化粧とかしませんから。それより、圭南さんに何かお礼がしたいのですけど。どういうのが好みですかね？」
「えっ、いいよ、物は」確かに、殆どすっぴんだな、こいつ、と美緒の顔を見ながら大悟は思う。でも、それはそれでとても美緒に合っている気がした。
「駄目です。気の済むようにさせてください」
「あーわかった。実は、圭南のところ子供が生まれたんだ。だから、何か赤ん坊の物でいいんじゃないか？」美緒の顔がぱっと輝く。
「そうします。駅前の百貨店で急いで見ます」

二人は歩いて五分ほどの百貨店のベビー用品売り場に行ってみた。美緒は、すぐにパイル地でできた、鈴が入った象の小さなぬいぐるみを選んだ。
「決断が早いな」大悟が感心したように言う。
「会社の人の出産祝い、いつも私が選んでいるんです。このおもちゃは赤ちゃんが気に入って、いつも持ち歩いているって、よく聞くので」

ぬいぐるみは、プレゼント用の袋にラッピングされた。
「香川さん、ちょっと2階のデッキ前のベンチで待っていてもらえますか？もう一つ買いたいものがあるので」大悟と別れ、美緒は地下に急いだ。

美緒が、2階のベンチに行くと、大悟は電話中だった。美緒に気づくと、
「わかった。今、行く」と言って、電話を切った。
「圭南が、この下に車を止めている」
「あっ、じゃあ下に行く前に、これ香川さんにこの前のお礼です」
美緒が小さな袋を差し
出す。
「何で。オレはいらないよ」
「大したものじゃないんです。飴とチョコの詰め合わせ。山に行く時にでも持って行ってください。また、人助けに使えるかもしれませんから」美緒の意味ありげな表情に大悟はちょっとだけ笑いながら頷いて、
「それでは、ありがたくいただきます」と受け取った。

二人がワンボックスカーに近づくと、運転席から男性が降りてきた。女将さんの言っていた通り、下からそっと支えてくれそうな人だな、と美緒は思う。この前も山ですれ違っているはずだが、記憶は無い。

圭南は
「おやおや、この間の人か」と、すぐにわかったようである。
「あー、スポーツクラブで偶然に会ってね」
美緒は、「木下です」と自己紹介をした。そして、
「この前は色々ありがとうございました」と深々と頭を下げた。
「いやいや、オレは別に大悟に貸しただけだから、礼を言われるよ

うなことはしていませんよ」ゆっくりと穏やかな口調で圭南は答える。
「いえっ、合羽も汚してしまって申し訳ありませんでした。これ、少しですけどお詫びとお礼の品として受け取ってください」美緒が袋を差し出すと、圭南は困ったように
「駄目駄目、受け取れませんよ」と手を振る。
「これ赤ちゃんのものなんです。受け取ってもらわないと行き場が無くなるので」
大悟がそこで
「もらっとけよ」と口を挟んだので、圭南は、しょうがないなという顔の後、少し微笑んで「ありがとう」と受け取った。そして、
「一緒にお昼食べに行きませんか？調布に美味しいカレー屋があるんです」と、美緒を誘った。
「いえいえ、結構です」美緒は後ずさりしたが、圭南は
「どうせなら、赤ん坊の顔を見ていって下さいよ。そこから病院まで近いので」と言い出した。大悟が美緒に向き直って、
「お前、この後何か用があるのか？」と聞く。美緒が「買物です」と答えると、それなら、まあ一緒に来いよ、ということで美緒は、2列目のシートに押し込まれてしまった。

前の席で並んで話す男二人の会話は、いかにも気が合う者同士の会話だった。美緒が聞くとは無く聞いていると、赤ん坊が生まれるということで、圭南は2シーターのスポーツカーからワンボックスに買い換えたらしい。圭南と、スポーツカーはミスマッチな気がしたが、大悟が「こいつは見かけによらず、スピード狂なんだ」と後ろを振り返って言う。

府中駅から南東方向に十五分ほど走らせると、こんな所にというような、何も無い閑散とした場所に、目的のカレー屋はあった。結構店は賑わっている。メニューを見ながら、圭南がお勧めはココナ

ッツカレーだと言うので、三人ともそれにした。大悟が
「子どもの名前は決まったのか？」と圭南に聞く。
「ああ、晴南だ。晴さんの晴の字にオレの南」
「わー、いい名前ですね。晴れた南なんて暖かそうで」美緒は思ったままを口にしたが、美緒の言葉に圭南は満足げであった。

その後、大悟と圭南は山の話を始めた。圭南も山岳部の夏の合宿には顔が出せそうだと言った後で、
「当分山には行けそうに無いけど、合宿の直前に足慣らしにどこか低めの山に行かないか？」と言う。
「いいよ。いつ頃？」という大悟の問いに
「梅雨が明ける頃と思われる、7月の海の日」
「まだ、随分先だな。まあ、多分、大丈夫だと思うけど」
「木下さんも、一緒にどうですか？」
「えっ、私なんか行ったら、足手まといになるだけですから」美緒は慌てて手を振って断った　「そうだ、五百メートルしか走れない奴には無理だ。五キロくらい走れるようになってからにしろ」

大悟はランニングマシーンの距離計を見ていたのだ。美緒はむっとして、
「7月までには、もっと走れるようにはなっています」と言ってからしまった、と思った。登山を断りながら、何を口走っているのだろう。

「じゃあ、話は決まりということで。それにうちの看護師の女性でも登りたいという人がいるんだよ。山をやったことが無いって言っているから、丁度良いかと思って」圭南の言葉に、大悟は、圭南が医者であること、今は、救急外来にいることなどを説明し始めた。
「でも、まだ研修医だけどね」圭南は、あくまで控えめな人のようである。美緒は、

「あの、圭南さんの上のお名前は何て言うんでしょう？」と聞いた。
「林です。でも、下の名前で呼んでください。圭さんとか。うちの山岳部はみんな下の名前で呼び合うから。木下さんの下の名前は？」
「美緒です」
「じゃあ、美緒ちゃんって呼んでいいかな？美緒ちゃんの年聞いていいですか？」美緒はちょっと気恥ずかしかったが、頷きながら、
「その海の日に二十五になります」と答えた。
「おーそれでは、美緒ちゃんの誕生祝は、山の上でっということで」話が決まってしまったようである。

カレーは、お勧めどおりにココナッツの風味が良く、よく煮込まれたチキンと味がマッチしていて、美緒は満足した。
そこから病院に向かう。それは圭南が勤めている大学付属の病院であった。車の中で、大悟が振り返って
「お前、山の装備とかあるのか？」と聞いてきた。
「今日、取りあえず靴を買いに行こうかと思っていたんです」
「何だ、登る気があったっていうことか。先に言えよ。一緒に行くか？いつもオレらが行っている店だけど、安心できるところだ。オレも買う物があるから」美緒は、ちょっと迷ったが、靴はちゃんとした物を買いたかったので、話に乗ることにした。

四人部屋の一番手前に、晴子のベッドがあった。隣に、小さな透明のボードに囲われたベビーベッドがあり、その中で赤ちゃんが眠っている。晴子は、扇屋で聞いた通りの、大らかな感じの女性だった。親しみ溢れる笑顔で、いきなりの訪問客を迎えてくれた。大悟が、
「ほら、この前、景徳山で拾った」と言うと
「ああっ、あの人」と話を聞いているようであった。美緒は、顔を赤らめながら、
「はじめまして。木下美緒です。この前は圭南さんにお世話になり

ました」とお辞儀をした。
「はじめまして。三塚晴子です。この前は大変だったみたいね。大悟君に怒鳴られたんじゃないの？」とにこにこしながら聞く。
「怒鳴っていませんよ」大悟が口を挟む。
「へー、君も進歩したようだ」晴子がおかしそうに笑う。圭南が
「美緒ちゃんにお祝いいただいたよ」と言って、袋包みを渡した。
「あらっ、ありがとう。お気遣いいただいちゃって」晴子は早速、袋を開け、かわいい、と言いながら赤ん坊の隣に置いた。晴子が大悟に、
「そういや、奈々ちゃんが会社の人たちと一緒に来るってよ」と言うと、大悟は、
「聞いています」と答えた。

えーっ、もしかすると彼女が来るわけ？それならそう言ってくれれば、こんな所まで来なかったのに。全く、何なんだ、この人って、と美緒は思い、大悟の顔色を窺ったが、大悟は何でもなさそうである。

「じゃあ、私、やっぱり先に帰ります」と美緒が言うと、大悟が
「何で。買いにいくんだろ？」と咎めるように言う。圭南が、
「ここ、駅から遠くて不便なんだ。大悟と一緒に送っていくから」と、言うのを聞いて、この人たちって、もしかすると、かなり鈍感かも、と美緒は思いながら、奈々が来る前に退散したい気持ちでいっぱいだった。

赤ん坊が目を覚まして、泣き出すと、今度はひとしきり、赤ん坊が誰に似ているかの話で盛り上がった。目がぱっちりしているところは、晴子に似ている、と美緒は思う。そうこうしている内に、女性の四人組が「おめでとうございます」と言いながら、入ってきた。晴子が、それぞれを紹介する。その四人組は、晴子の会社の後輩で

あった。美緒のことを、大悟が山で助けた人と言った途端、奈々が「あー、あの」とぱっと反応した。美緒は、反射的に頭を下げ、「すみませんでした」と予定をキャンセルさせてしまったことを詫びた。

「いえいえ、大丈夫です。お陰でその後、三ツ星レストランでご馳走してもらえましたから」にっこり笑う奈々は、化粧映えのする都会的な美しい顔立ちだった。奈々は、大悟に

「私、今日、この後空いているけど？」と言う。大悟は、あっさり

「オレは駄目だ。どうせ、明日も会うんだからいいだろ」と、素気無く答える。

美緒は、内心えーっとドキドキものであった。そんな、私との買い物なんて知られたら、まずいでしょうに、と。

「じゃあ、そろそろ行くわ」大悟が圭南に声をかける。晴子が大悟と美緒に礼を言い、圭南が四人組に「皆さんもこの後、駅まで送りますから」と言って、三人は部屋を出た。美緒は、奈々の視線を背中に感じて、身を縮めた。

車の中で、圭南が美緒に山行きの連絡をするから、アドレスを教えてくれないかと言うので、美緒は名刺の裏に携帯のアドレスと番号を書いて渡し、圭南の名刺を受け取った。

調布駅で圭南と別れ、ホームに向かうと、都営新宿線直通列車が入って来た。神保町に行くには都合がいい。電車の中では特に話すこともなく、二人とも黙って座っているだけだったが、美緒はそれが別に苦痛というわけでも無かった。そして無言で下りた雨の山中を思い出した。

神田のはずれの、裏通りに間口の狭いその店はあった。「山荘トガワ」。青地に白文字で書かれたテント張りの看板は味も素っ気も

無く、いかにも玄人好みの雰囲気だった。大悟が「こんちはっ」と入っていく。意外に、店は奥が深い。奥にいた四十歳ぐらいの小柄な男性は、

「おう、大悟」と答えた後、美緒を見て、

「何だ、新しい彼女か？」と聞いてきた。大悟の

「違うよ。お客さん連れてきてやったの」という答えに、明らかに店主は一瞬怪訝そうな顔をした。美緒は、この人も事情を知っている人だな、とすぐにピンと来た。

「おう、そうか。店主の戸川です」と美緒に挨拶してきたので、美緒も自己紹介をする。今日は、何度も自己紹介をする日だな、と思いながら。

「靴が欲しいんだって。経験は、半年。体力は無いから、軽めがいいと思う」大悟が勝手に説明を始める。

「半年なんて、昔の話です」美緒は慌てて否定した。

「どんな山に登りたいの？」戸川は、美緒に直接聞いてきた。

「はあ、いずれは三千メートル級の山を縦走したいですけど」美緒は遠慮がちに答えた。ちょっと大きく出すぎたかな、と思いながら。大悟が「そりゃ、当分先だろ。まだ、五百」と言いかけたが、美緒のむっとした顔を見て途中で口をつぐんだ。戸川は、

「まあ、継続して登っていれば、いずれは行けるようになるよ。大悟に連れて行ってもらえばいい」とさらっと言い放った。大悟は、最後の部分に特に関心を払わず、

「そんな先の話のことより、確実に低山を登れる靴の方がいいよ。ヨシさん、こいつの足、結構細身で甲高だから、日本製は合わないと思う」と話すので、美緒は内心、エエッと思う。そんな足の形までわかっている間柄って、どういう間柄なのか、誰でも勘ぐるであろう。やっぱり、この人鈍感なんだと、再確認した気分だった。

美緒は、厚手のソックスを買い、それを履いて戸川が出す靴を何足か試した。そして、その中のイタリア製の靴のフィット感が気に入って、少々お値段が張ったがそれに決めた。デザインもいいし、それに久しぶりの登山靴は、それだけで気分が高揚する。でも、七月のお誕生日登山までは、誰とどこに登ればいいんだろう。大悟がその気持ちに気づいたかのように、

「そうだ、ここの店の初心者向けのツアーで、取りあえず登ったらどうだ」と言い出した。戸川が、

「五月は高尾山だよ。靴の足慣らしにも丁度いいし、どうです？」と誘ってくれたので、美緒は、参加することにした。

大悟は、オーダーしてあった、インソールを受け取り、戸川と山談義を始めたので、美緒は改めて店内を見回してみる。壁一面に隙間無く、ザックや、ウェア、小物がかけられ、天井からも寝袋や、ランプなどがぶら下がっている。床には一張り、テントが広げられていた。久しぶりに山の道具を見てみると、素材なども随分変わっているようだった。ウェアもおしゃれになっている。家に仕舞ってあった山の道具は、靴以外はまだ使えそうだったので、今すぐ買い換える気は無かったが、道具やウェアを見るだけでも、新鮮で面白い。山への期待感がどんどん高まっていく。

店を出る頃には、午後六時を回っていた。大悟が、

「夕飯、食っていくか？」と聞くので、美緒が、「はい」と答えると、

「定食屋でいいかな？何気で美味い店があるんだ」と言う。

「夕飯は、そういう方が落ち着きます」という美緒の答えで、更に裏の方にある、小さな定食屋の暖簾をくぐった。丁度、二人組のお客さんが出ていくところで、二人は二つしかないテーブル席の一つ

に着くことができた。カウンター席は、八席ほどだったが、そこもほぼ満席だった。
「明日は、横メシだから、今日はこういうものが喰いたかったんだよ」と大悟が言う。
「横メシ？」
「横文字でメニューが書かれている食事のこと。奈々はそういうのが好きなんだ」
美緒は苦笑する。奈々の都会的な顔立ちを思い出し、横メシなんて言われる、有名店の料理人を気の毒に思った。

「横メシだって、美味しいでしょ？」
「オレ、ああいうのは飽きるんだよ。そんなにうまいとも思わないしな。そういうところは、根っからの日本人なんだろうな」大悟は新潟出身だと言う。
「米どころですものね」
「ああ。米食わないと落ち着かないんだよ。だけど東京の米は不味いしなー。でも、奈々は東京育ちだから、米の美味い不味いがわからないって言うんだよな」

美緒も、東京の米は不味いと思っていた。きっと、水が不味いからなのだろうけど、東京育ちの人は確かにその味の違いがわからない。そのことは、美緒も東京に出てきて最初に驚いたことの一つだった。

大悟は先にビールを頼み、それから壁に貼られたお品書きから、大悟は生姜焼き定食のご飯大盛り、美緒はさばの味噌煮定食にした。店は、六十歳くらいのオヤジさんが一人で厨房を担当し、奥さんが配膳や接客、洗い物をやっている。夫婦二人だけで忙しそうであったが、二人の息が合っていることがよくわかり、それがまた心地よさにつながっていた。

ビールを飲みながら、大悟が
「そういや、仕事の方はどうした？」と聞く。美緒は、始末書を書き、貿易実務の分厚い本を部長から渡され、毎週レポートを出す羽目になったことを報告した。
「でも、勉強になります。いい加減な知識でやる恐さも身に染みましたし」美緒は、自分でも、もっと高いレベルを目指したいと思うようになっていたのだ。
「気持ちが前向きなのが、一番だからな」
本当に、二週間前のあの日の自分からは想像もつかないことだった。

それから、話は、山荘トガワに移った。戸川さんは下の名前を義男といい、見た目は山男には見えないが、海外の高峰も登っている有名な登山家であること。しかし、そういうことを決してひけらかさず、高尾山のような所にも初心者と一緒に喜んで行くことなどを大悟は話した。美緒が
「ああいう方と登ると、安心できますよね」と言ったので、大悟が
「それは、オレみたいなのと登ると、安心できないってことか？」
とややむっとした物言いで返してきたので、美緒は、
「え？いえっ」と首を傾げて誤魔化した。

さばの味噌煮は、添え物の葱といい、店の雰囲気に似合わず上品な味だった。良い味噌を使っていることは味噌汁からもわかった。定食屋にありがちな、味噌汁の味噌が煮込まれ、わかめがクタクタになっていることもない。厨房を見ると、注文の度に小鍋に移して、温め直している。漬物も市販の化学っぽい色や味がしない、自家製の糠みそ漬けのようであり、日本人であることが嬉しくなる味だった。黙々と食べていると、
「お前って、本当に美味そうに食べるな」と感心したように言う。

大悟は食べ終わっていた。おばさんが、お茶を注いでくれる。
「えっ、そうですか。美味しいものを食べると自然と幸せな気持ちになるからかな」
「そりゃなるけど、そこまで顔に出る奴も珍しいよ。いや、そんな顔をしてくれた方が連れて来た者としては、嬉しいけどね」大悟は、どんな高級料理でも、すまして食べる奈々を思い出していた。

帰りは、スポーツクラブの自転車置き場まで、一緒に戻って別れた。一応、何気で送ってくれたことは、大悟がまた来た道を引き返したことでわかった。

翌週の土曜には、スポーツジムに大悟の姿は無かった。よく考えればスタジオレッスンの時間が決まっている美緒とは違って、大悟はいつ来てもいいのである。それに土曜は彼女とのデートだってあるだろう。

美緒は、先週からプラス百メートルでは、七月の登山に間に合わないと思い、目標をプラス二百メートルの七百メートルにした。たった、二百メートルだったが、五百メートルから先は体の重みがずっしりと足に来た。ランニングマシーンの速度を落とす。歩いているのと大して変わらない。これでは、毎週二百メートルずつ増やすのは無理そうである。週の半ばにもう一度来て、何とか百メートルずつ延ばすようにするしかない。とにかく、後には引けない気持ちだった。

次の水曜の夜、仕事の後、七時頃に来てまた走った。夜に来るのは初めてだったが、いかにも仕事帰りという感じの若い人が多かった。さすがに同世代の前では、あまり格好悪い走りはできないと思ったせいか、それとも前回から四日しか空けていなかったせいか、五百メートルを過ぎても同じペースで走ることができた。

走り終えて、トレーニングルームを出るところで大悟に会った。走りに来ていることがわかってしまって、美緒はちょっと気恥ずかしい。大悟は特に何だでもなさそうに、
「おう、土曜以外も来てんのか」と声をかけてきた。
「まあ、今日からですけど。香川さんは、週に何回来ているんです？」
「来られる時は、週に二、三回。仕事が忙しくなると週末に来るのが精一杯だけどな。お前、トレーニングのために来ているんだったら、ランニングだけじゃなく、脚力アップのための、他のマシーンもやったらどうだ？」

なるほど。その方が、ランニングの距離も延ばせそうである。早速、近くにいたトレーナーに登山目的の場合のアドバイスをもらった。何でもやろうという気になっている自分に、美緒は自分のことながら驚いた。大悟にその日の夕飯も誘われたが、それは断った。金曜までに部長にレポートを出すには、本を読まなければならないからである。

次の日曜が、高尾山の登山であった。十人の参加者と戸川さん、そして店の山の会のベテランメンバーがサポートとして、来ていた。最初に簡単に自己紹介をすると、カップルや家族連ればかりで、一人で参加しているのは美緒だけであった。最初に登り方についての、簡単なレクチャーがあり、その後一列で登り始めた。

元々知らない人が苦手な美緒は、列の最後についた。戸川さんが、しんがりを務める。そして、美緒を気遣って、いろいろ話しかけてくれた。何となく、大悟とどこで知り合ったかを知りたいようであったが、それを話すと、自分の恥を曝すことになるので、そのあたりは「山で偶然に」と言って誤魔化した。

高尾山は新緑の薄緑色に覆われていた。若葉一枚一枚が、陽の光を浴び、みずみずしい輝きを放っている。そこから発せられるやさしく包み込むようなエネルギーが、お座なりな言葉で言えば、癒しなのだろう。これで登山者がもっと少なければ、そこは都会の喧騒を忘れられる場所であったが、いかんせん都会にあまりに近く、山は大変な賑わいであった。

次の土曜にジムで大悟に会った時、走りながら簡単に高尾山の報告をした。靴がすごく足に合っていたこと。特に体力的には問題なく登れたこと。知らない人ばかりであったが、戸川さんが気遣ってくれて、頂上ではお弁当を交換したりして、結構話が盛り上がったことなどを。大悟はふーんと言いながら聞いていたが、安心したようであった。

六月十八日の土曜日、美緒は実家のある、群馬県の富岡に帰った。駅で五月と待ち合わせ、お昼を一緒に食べることになっていた。五月は東京の大学を出た後、実家に帰り、地元の高校で英語の先生をやっていた。お正月にも会っているので、半年振りであったが、会った瞬間から昨日会った人のように話せるのだから、親友というものは不思議なものである。

五月の車で、バイバス沿いのレストランに行き、ランチセットを食べながら、近況を話し合った。五月は、底辺校と呼ばれる最初の赴任校で苦労していたが、ようやく授業のやり方をつかめてきたことを話し、美緒は景徳山のできごとを話した。五月は美緒の行動に呆れると共に、大悟の奇特さにも驚いていた。美緒は、大悟の過去には触れなかった。

そろそろ行こうという段になって、五月は、

「今日、裕貴君の家で発表することがあるから」と言う。美緒が「先に教えてよ」と言っても五月は「後でわかるよ」と言って、にこにこしながら席を立ってしまった。

裕貴の家には、既にバスケ部の同級生たち五人が集まっていた。毎年、裕貴の命日に近い、土曜か日曜に集まることになっていた。今年は、丁度命日が土曜に重なったのである。裕貴の母、静子が喜んで、出迎えてくれる。みんなでいつもの通り、順番に近況を話す。二浪して大学に入った、航太も無事に地元の銀行に就職していた。次は五月の番だ。

「えーっと、実は、そこにいる岸川君と結婚することになりました」はにかむように五月が話すと、みんなが一斉に
「えーっ」「いつから、付き合っていたんだよ」「どういうことだよ、岸川」と騒ぎ出した。岸川は含み笑いをしながら黙っている。美緒もびっくりして、口がしばらく開いたままだった。
「ちょっと、五月、何で黙っていたのよ」美緒が怒ると、
「実は付き合いだしてからまだ二ヶ月くらいなのよ」と言い、またみんなが一斉に「えーっ」と言うのであった。

県庁の高校教育課に勤める岸川君と、たまたま会い、あれよあれよという間にそういうことになったらしい。高校の時、バスケ部のマネージャーだった五月が、その頃、岸川君に気があったことは美緒も知っていたが、岸川君は硬派で、全く女子を寄せ付けないタイプだったのである。

ひとしきり盛り上がった後で、静子が最後に口を開いた。
「みんな、今年も集まってくれてありがとう。全員就職もしたし、五月ちゃんと岸川君の結婚も決まったし、これからみんな忙しくなると思うの。だから、こうやって命日に集まるのは最後にしたいと

思うの」
「えっ、そんな」と声が上がる。静子は続けた。
「うちはね、いつでも来てもらっていいのよ。来てくれれば本当、嬉しい。でも、みんなの生活を優先してほしいの。だから、これは私からのお願いなの」話しながら、静子の視線は美緒を捉えていた。美緒はその視線に応えながらも、そう言われてもまたきっと命日に来てしまうだろうと思う。

その時、「ただいま」と裕貴の弟の裕人が帰ってきた。去年はいなかったので、二年ぶりである。その姿を見て、みんなは一瞬息をのんだ。その顔立ちといい、背格好といい、あまりに裕人が裕貴に似ていた。裕人は裕貴と七歳離れているので、今、高三のはずである。美緒も一瞬、そこに裕貴が現れたような錯覚に陥った。「裕貴」と呼びたい衝動を抑える。高三のままの裕貴がいるわけがない、と思って。

様子を見ていた静子が、美緒に向かって口を開いた。
「美緒ちゃんも、次に来る時は彼氏を連れてきてね」
「おばさん、プレッシャーかけないでくださいよ」と美緒が言うと、
「いいえ、本当に。美緒ちゃんには本当に幸せになってもらいたいのよ」

美緒は、静子が自分を心配してくれていることは、よくわかっていた。
「大丈夫です。ちゃんと幸せになりますから。でも、彼氏はいつ連れて来られるかわかりませんけど」と少し無理して明るく答えた。

翌週の土曜日、美緒がバレエクラスを終えて出てくると、丁度、大悟がジムに入ってくるところだった。
「先週の土曜は、珍しく来ていなかったな」大悟の問いに、美緒は、

一瞬答えをためらったが、今更隠すようなことではないと思い、
「裕貴の命日で、実家に帰っていたので」と答えた。
「実家ってどこ？」
「群馬の富岡です」
「富岡か。微妙な遠さだな」とだけ言って、中に入っていく。大悟が命日の話題を避けたように感じ、美緒はひっかかりを覚えた。

七月に入り、美緒もランニングで三キロほど走れるようになってきた。また、筋トレが効いているのか、バレエでもポーズがぴたっと決まるようになったのは、嬉しい誤算だった。

圭南からメールが来て、海の日登山の概要が知らされた。場所は立岩山。往復は圭南の車で。朝五時半に府中の前回待ち合わせた場所に集合ということであった。

海の日の前々日には梅雨が明けたようで、海の日は朝から夏の空気が漂っていた。圭南が連れて来た看護師は、瀬田涼子といい、あどけなさが残る可愛い感じの子であった。車の二列目シートに並んで座りながら、美緒が色々聞くと、年は二十一歳、まだ今年、看護学校を出て就職したばかりということであった。

「救急外来は、素早い判断と機敏な動きを求められるんですけど、毎日ドジばかり踏んでいて嫌になります」と言う。圭南が
「大丈夫だよ。僕も最初はひどかった。じきに慣れるから」とミラー越しに慰める。
「林先生は、いつもそう言ってくれますけど、私あまり気が利かないタイプなんです」

確かに美緒の目から見ても、どこかお嬢さんっぽくて、自分で気を利かして動くタイプではなさそうである。

「病院の外では、下の名前で呼んでくれ。こっちも下の名前で呼ぶから」と圭南に言われ、「はい」と可愛く素直に答える姿などは、いかにも新人の看護師らしく、美緒は、自分とは違う世界にいる人だな、と思うのだった。

立岩山の麓には八時過ぎに到着した。ゴンドラリフトで登山口まで上り、そこから歩きはじめる。登りは二時間半ということであった。さすがにトレーニングを続けた甲斐があったようで、美緒は余裕すらもって登ることができた。

圭南の話では、涼子は特に運動はしていないけど、高校ではテニス部だったし、立ち仕事だからまあ、大丈夫じゃないかということであったが、途中から明らかにへばり気味で、ついて来られなくなった。

圭南が「先に行っていてくれ」と言うので、美緒と大悟は先に登頂し、三百六十度の大パノラマを堪能しながら、二人を待った。

立岩山は単独峰であり、八ヶ岳連峰、南アルプス、中央アルプス、更には北アルプスなど幾重にも広がる景色を見渡せる。大悟は地図を見ながら、そのそれぞれを美緒に説明してくれた。三千メートルの山々が連なる南アルプスは、特に悠然とした気高さを伴う美しさがあり、いつまで見ていても見飽きることはなかった。

「いいな。南アルプス。あそこに登ってみたい」美緒は口に出してから、また馬鹿にされること言っちゃったと思ったが、大悟は意外にも

「ああ、いずれな」と言う。

いずれ、私も登れるのだろうか、登ってみたい。美緒は大悟が否定しなかったことが素直に嬉しかった。

二十分ぐらい遅れて、二人がようやく到着した。圭南が涼子のザックを持っている。涼子は、
「すみません」と一言言ったきり、座り込んでしまった。
二人が一息ついた後、お弁当タイムになったが、涼子は食欲もあまり無いようであった。圭南がゼリー状のスポーツ飲料を「これで補給しておきなさい」と渡し、涼子もそれは口にしていた。

お弁当を食べた後、圭南がコーヒーを淹れる準備を始めた。インスタントではなく、ドリップまで持ってきている。コーヒーを各自に配り、圭南は更に後ろを向いて何か、がさこそやりだした。それから、美緒の方にぱっと向き直り、「おめでとう」と差し出したものは、大きなロウソク二本と小さなロウソク五本を立てた小さめのロールケーキだった。全く予期していないできごとで、美緒はちょっとぐっときてしまい、「えっ」と言うのが精一杯だった。就職してからの二回の誕生日は、誰にも祝われず、一人で小さなケーキを食べただけで終わっていた。

「吹き消して」と圭南に促され、何とか涙を押し止め、ロウソクを吹き消す。涼子が、「お誕生日だったんですね。おめでとうございます」と拍手をしてくれる。大悟が、
「これは、ささやかなプレゼントだ」とラッピングされた小さな袋包みを出してきた。開けると、キーホルダー型のミニランタンであった。電池式でライトが光る。「可愛い」と涼子が横からのぞきこむ。圭南が
「大悟にしては珍しく気が利いているな。スポーツドリンクの粉末でも持ってくるかと思ったよ」と茶化した。美緒は早速それをザックに付けた後、二人の方を向き直って、
「ありがとうございます」と深々とお辞儀をした。
「すごく嬉しいです。まさか、こんなことしてもらえるとは思って

もいなかったので」
圭南が「誕生祝は山の上でと言ったでしょうが」と言うが、美緒はまさか本当にそんなことをしてくれるとは思いもしなかったのである。ささやかでも、心温まるお祝いを準備してくれた二人の気遣いに感謝せずにはいられなかった。

海の日登山が終わり、美緒は取りあえずまた次の山の目標が無くなったが、いつか南アルプスに登るという希望だけは持ち続けようと思うことにした。

八月の最初の土曜日にジムで大悟に会った時に、誕生祝のお礼を言うと、昼飯でも食おうということになり、近くのオープンカフェに行った。大悟が、先週末に大学の合宿に行ったが、圭南は二泊の予定が仕事で一泊になり、途中の山小屋から帰った。ところが、次の日はひどい雷雨になり、帰って正解だったかも、という話をしている時に、大悟の携帯が鳴った。「圭南の自宅からだ」大悟が電話に出る。

「もしもし。あー晴さんか。丁度、木下と圭南の噂をしていたところでしたよ。えぇ、別に今は、周りには木下以外はいませんけど、どうしました?」

運ばれてきたパスタを大悟が先に食べろ、と手で合図してきたので、美緒は遠慮なくいただくことにした。伸びたパスタはいただけないものだし、と思って。大悟は「えぇ」とか「まさか」とか言いながら、晴子の話を聞いている。そして、考え込んでいるような顔つきで、
「一泊で帰りました。仕事だと言っていました」と話すのを聞いて、美緒は嫌な予感がしてきた。
「わかりました。それなら、今晩調べてみますよ。また、連絡しま

す」と言って大悟は電話を切った。大悟の顔つきが険しい。押し黙ったまま、パスタにも手をつけずに何かを考えていた。そして、
「あのさ、今晩空いているか？」と聞いてきた。
「空いていますけど？」
「晴さんが、圭南の浮気を疑っているんだ。最近、病院での夜勤が多くておかしい。急患がとか言うんだけど、急に増えたって。それに車のメーターがいつもよりかなり回っているそうなんだ。合宿も二泊したと言っているらしいし」

美緒は、それは自分が聞いてもいい話なのだろうかと思ったが、自分がいることは晴子さんもわかっていたのだから、いいのだろうと思うことにした。

「それで、昨日に続いて今日も宿直だって言うんだけど、絶対変だし、かと言って夜間に病院に電話するのもおかしいし、と言うから調べるって言っちゃったけど……。でも、いきなり夜間に救急に圭南を訪ねて、もしいたら、何しに来た？ってことになっちゃうからこっそり調べるしかないなと思うんだ。で、一人だと難しいから協力してもらいたいんだけど、いいかな？」

美緒は圭南が浮気だなんて、信じられない気持ちだった。病室で赤ちゃんを抱きながら、あんなに幸せそうな顔をしていたのに。
「いいですよ。予定は無いですし、明日は休みですから」
「お前、車の運転できるか？」
「群馬に帰った時は、時々運転していますけど、東京ではしたこと無いです」
「じゃあ、決定。レンタカーを借りよう」美緒の最後の言葉は無視されたようである。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0919l/

最愛

2010年10月15日22時33分発行